増補 俳諧歳時記草

江戸 曲亭主人 纂輔
藍亭青藍 増補

冬

漢書律暦志 太陰者北方、北、伏也、陽氣伏於下、於時為冬、冬、終也、物終藏、乃可称。

顓頊 帝○魏相曰、北方之神、玄冥神顓頊乘坎執權、司冬。

玄冥 顓頊其神、玄冥、云云、顓頊、黒精之君、玄冥、水官之臣、少皞氏之子、曰脩、曰熙、相代為水官。

應鍾 律 月令廣義 鍾者動也、言物應陽而動、下藏也。

月令 冬月、其帝顓頊、其神玄冥、云云、顓頊、黒精之君、玄冥、水官之臣、少皞氏之子、曰脩、曰熙、相代為水官。

立冬 同上 孝經緯云、霜降後十五日斗指乾為立冬、十月節、冬、終也、萬物皆收藏。

小雪 同上 立冬後十五日斗指亥為小雪、十月中、天地積陰温則為雨、寒則為雪、時言者寒未深而雪未大也。

孟冬 廣韻 孟勉也、始也、冬始故曰孟冬。

折木 通俗志作折木、誤矣、當作折木、礼記 鄭玄注 孟冬者日月會於折木之律。

而斗建亥之辰上天 爾雅 冬為上天是也 玄英 爾雅 冬為玄英一日安寧註云氣黑而英青故曰玄英 羽音 月令 其音羽律中應鍾 律

檀 歳華紀麗 感清商而律變云云又曰槐檀遽改於歳餘 爾雅翼 淮南子記十二月之木十月檀檀陰木也周礼冬取槐檀之火○按むるふ律檀木の火と取て律と改ひるの義

ふや、

十月 陽月

爾雅 十月為陽月孫炎註云此月純陰用事嫌于無陽故曰陽月或始于亥生于子十月建亥為陽之始故十月純陰而称陽月以陽根于陰為之始 良月 左傳 魯公叔出奔衛三年而復之冬使以十月入曰良月也就盈數焉 上冬 纂要 十月曰上冬又曰暢月 玄冬 同上 冬曰玄冬三冬九冬 秦

正 月令廣義 秦以十月為歳首為改歳 初冬 和哥式 初冬ハ十月朔日の心ともよゝ又ハ冬来て五〜三日の心ともいゝ多し 時雨月 藏王 あらそゝて木の葉のけちめ云月冬のそしめふ 初霜月 同上 草と本も何をそゝもゝ定家 ぞらけあづもちろき 神無月 俳諧歳時記 奥儀抄ふこの月諸人のとちろこ長明 神出雲國の大社ふ集ふ故ふ名づくとあり又ふ草ふそ此月大神宮の御許へ諸神あつまりあふ故ふ名づくとあり又貞治の頃藤沢山の沙門由阿ゞ万葉集の注そゝて詞林采葉抄とゝそ中ふ一天下の神無月とハ出雲國ふそ神有月とも申ゝ是諸神の集ふくふ故ゝその神在の浦ふ神々来臨の時ふ童の作ふるゞ如き箸舟波の上ふ浮ぶこ数もちゝむ諸神ハうれ浦の神在の社ふ集りゆひて大社へ参ふるゞ神在の社ハ不卦山とゝ所ふ立さゝ人佐太大明神と申ゝ是則傳奏の神ふそゝ云云

この説異端ふ近しゐとへ出雲ふまそる事ありこと、
一天下のうち何ぞ神あ〜とゝ月あゝんや、荷田東麻
呂翁の説ふ神無月ハ雷無月ニ十月ハ純陰の月ゐれ
ハ雷の声収まるつる故ふいゝ六月と雷鳴月とい
ふふ對きりと、これ古人未發の論ゐり、雷と神とのこ
いふとハ萬葉ふ神の如聞つる瀧とよめるを、後撰集ふ
ちうやふる神ふもわらぬ我中の雲ねたるうふちのうとを
ゆくの水と詠るを雷神と、又伊勢物語ふ神さへいみ
きう、又云神ふるさるときふ云云此外證歌多し○青
藍云世諺問答ふ此月と神無月と申ハ伊弉冊尊
崩〜ゐ〜月ゐれハ申ニ云云貝原篤信翁ハ此月ハ卦ふ
おいて坤とも純陰事と用ひて一陽未復陽無の月と、
神ハ陽の霊陽ゐきことまと神ゐとゝ云云ゐくゝとゝ
とも荷田大人の説至當とゝべし、此月諸神出雲國
へ集りこゐふ故ふ神無月とゝる説ハ甚ざしき妄説と
いとども、能諸ハ趣のをゝきふまぐうひて句作を多し、

五元集 高砂や祢宜の
湯治の神無月 其角

十月

黄鍾 律 月令 仲冬月律中黄鍾高誘注云鍾聚也陽氣聚于黄泉之下

大雪 節 月令廣義 孝經緯云小雪後十五日斗指壬為大雪十一月節也

言積陰為雪至此栗烈而大矣

仲冬 月令 仲冬之月云云

周正 月令廣義

通鑑云武王既勝殷乃改正朔以建子月為正月

復月 五月一陰生至十一月一陽生是謂一陽来復故以此月祢復月手

暢月 礼記注暢充也言以此月万物皆充實於内故也朱氏謂陽久屈所以不可発泄者而後伸故曰暢月也淮南子命曰暢月注云以民人無事間暢故曰暢月

雪見月 藏王こもりつる空のちるゝふ雪見月けこと冬のあるゐあり

天正月 十一月 淮南子仲冬之月命曰辜月

辜月 月令廣義 有家月建子周正月是曆家曰天正月

神楽月 藏王まちふぎこまの言居の神楽月

たのしさゝき葉の音のさやゝきと定家○露水云陽爻わらはゝと神の岩戸より出るを比して神楽と奏する月こらつゝ〜いくまで此月五節の舞ありて又東三条の御神楽ホと行はるゝ名づけこるみゝ

霜降月 霜ふり月の空とうやゝ雪けゝゝえて曇りらん、

十二月 大呂 律 高秀注呂侶也萬物萌動于下未能達見所以配黄鍾助陽宣上せうん節月令廣義孝經緯云冬至切也、小寒 後十五日、斗指癸為小寒、大寒 中同上小寒後十五日、斗指丑為大寒、季冬 月令季冬之月云云、

臘月 説文冬至後三戌為臘祭百神也漢以戌日為臘、魏以辰日晋以丑日、礼傳臘者獵也、因獵取獸以祭先祖蔡邕想断臘者歳終大祭也故小臘月といふ 涂月

月令斗建丑之辰一曰涂月、殷正 夏以十三月為正殷以十二月為正周以十一月為正故有殷正之名、 凋年 文選舞鶴賦動陰殺節急景凋年云々凋年八年の凋落もるる意之、急景 月令廣義窮冬日景短急云云 窮月 礼記季冬之月日窮干次月窮干紀星迴干天數將幾終注云日月星辰運行至此皆迮故處也、次舍也紀猶会、

霜蟾 蟾八月中ふ蟾蜍ありとゝふより月の事を蟾とゝふ霜蟾ハゝゝぶ霜夜の月の事ゝ、霜降ろあれば秋冬の月皆霜蟾とゝふべし陳與義が秋夜詠月詩ふ狀霜蟾とゝゝえゝ紀ぐ冬の月も限らじ、殊更十二月の異名の中ふ雜て増山の井ふ出せり翰墨大全の意不審あり、 弟月 此月八一年中月の終なり故ふ俗ふ乙子月とゝふ和の諺ふ末の子を乙子と称すれぐゝ、 春待月 藏玉 ゝれてゆくとゝゝく身ふそふ老ふを長明と夫待月のいそうきこゝ 梅初月 藏玉

花ハまことつわむえごうとほのかにそ梅まつ月のそろいあらく、顕昭

三冬月 藏王

冬月

ふるときそそろえくこと冬月

いそうふつもる雪の枝ときさ定家

十月

亥の子 けの部 玄猪の 射場

公事根源 先此月の三日ハ左右衛門ノ尉ハ堺の堀と

始 はしめ

条下ハ注也、

はしめる、その日ハ天子ハ殿ハ出させひて弓を

御覧ぜる也、公卿以下束帯ハそこれをいる天子御射

席をもうせて弓矢と御座の左右のうきハ多そらる是

と群臣とひやと〜〜弓を射ハ〜ふ〜〜誠ハ文武二ツ

の道ハ一をうく〜ぐらぐる故ハ武をもらるせ〜ふ〜〜、

○江次第ハ十月五日射場始注ニ蔵人

式七日ノ、五日ハ残菊の宴ハ〜〜〜〜、

兼三冬物

凍 字彙 孟冬、 始て凍る。

鮒 江湖の産魚ノ大きハ

多し、頭口大きく尾細し、これを煮食ハ腥く佳品ハ

らぐ冬月和ハ堅田近江の漁人多くこれと取、賤民賞

して饌ハ 猿蓑集 時雨きて

並ひ〜〜るいさ〜〜船 千律師

勇魚取 方薬 伊沙那

ぢらまり、いふ〜〜ハ弓

ぞ射てこ〜〜しとぞ、

今ハふく

十一月

平川祭 上酉日 夏の

三枝祭の

条〜〜ぐし、

忌日御飯 朔日 公事根源 六

月ハ〜〜〜〜、

鰯の頭挓 せの部節分

の条ハ注也、

いぬる年 詩経 来歳

ハ莫

ろ

十月

爐開 炉を置寒を禦くこれを炉

開きとふ又茶人も炉開き会

と 進爐炭 煖爐會 事文類聚 十月の朔有司

も、 煖爐炭と進民間置酒して

煖炉会とふも、 呂原明歳時雑記 京人十月朔酒と炙

て乃鬢肉と炉中ハ炙て圍居して飲喝ハこれを煖炉

会と

いふ、 兼三冬物 爐 和漢三才画会 地爐和

名炭櫃の畧茶湯ハ

これを用ハ只爐と

称、方一尺四寸、

十二月

臘日 風俗通 礼傳

云夏ハ嘉平と

いん殿ハ清祀といふ周ハ大蜡といひ漢改て臘といふ臘ハ獵なり獸を獵し取て先祖を祭る[説文]冬至の後三戌臘に百神を祭る徐鍇曰臘ハ合也諸神を合せ祭ると

臘八粥 [ふしちかゆ]の部 濕糟 粥の条ハ注を

蠟梅 [らうばい] 時珍曰蠟梅一名黄梅花此者もと梅の類ハあらず其梅と同時ハ因てなり香又相近し色蜜蠟ハ似くり故ハ此名を得[大和本草]蠟梅近年中華よりわたる臘月ハ黄花を開く蘭の香ハ似くり葉ハ柳の葉ハ似て小ふて長し木の高さ二三尺四五尺なり過ぎ大坂ハて唐梅とらく梅の類ハあらず○臘月ハ咲の義ハあらず其花黄蠟色ハ似くり故ハ蠟梅と名づく

鹿賣 [かのうり]の部 薬喰の条ハ出ス

は

十月

拜墳 一日[夢華録]十月の朔都城の士庶皆城を出て墳を饗食し禁中車馬陵ハ朝廷寒食の節の如し

芭蕉忌 十日 俳諧正風体の開祖

芭蕉菴桃青翁の忌日なり泊船堂杖錢子是佛坊風羅坊ハの号あり又無名庵幻住菴蓑虫庵瓢竹菴

ハの庵号あり[十論為辨抄]支考著 故翁の雅名ハ金作といふるよ伊賀ハ四姓ありて桃地黨の中の松尾氏なりとぞむ〻俳諧の名ハ宗房といひ落髪の後桃姓のひきこゝろ桃青ともいふるハ梅子熟世界の意なりしかやまのふハ家名をとゝけざるのいひあらん十九の年ハ官をゝのそきて洛陽ハ李吟を師とし武藤ハ其角嵐雪と門人とせり深川の芭蕉菴ハ隠遁なりしを三十六のとしなりしとぞ[風俗文選]許六選 作者列傳三六芭蕉翁ハ伊賀の人に武名ハ松尾甚七郎藤て世ハ次郎と遺えとし武のハ石川の水道を修して四年ハ成る速ハ功と捨て深川芭蕉菴ハ入る年三十七十六ハ[芭蕉翁正傳]藤堂家藩竹二坊撰寛政十年印本 芭蕉翁桃青ハ伊賀國阿拜郡柘植村の人なりて俗称松尾半七後ハ改て松尾忠左衛門宗房と呼正保元甲申の年の生れなりて弥平兵衛宗清の苗裔なりとて宗房と名づく父の名ハ儀左衛門母ハ豫州宇和島の産に桃地氏の娘なり支考ハ公翁の碑名ハ其先ハ桃地の黨とやいふ今の氏ハ松尾なりとハ書ハ母の氏と聞あやまりしものに弥平兵衛宗清ハ屋

敷跡今ハ存り、庭ハ大なる石の手水鉢あり、人々ふこ
まと名物とす、其類今同郷ハ姓をとゝく、拓植氏、松尾氏
福地氏ハ是なり、儀左エ門、嫡子與左エ門と、上野赤坂町ハ
手跡師範として家業とす、次男半左エ門ハ藤堂主殿
長基の臣となり、三男忠右エ門芭蕉翁ハ寛文壬寅年藤
堂新七郎良精の臣となる夫より嫡子主計良忠俳名蟬吟
へ隨身をし、伊賀上野桐雨軒記桐雨ハ翁の門人蟬吟子
ハ洛の季吟ハ俳諧を學び申さる故ハ翁もこもハ其
門ハ入て、いぬとさゝるれ世の中ハ是二酉の年、こ発句あ
つ〳〵十四歳の時く、明暦三年ハ蟬吟子ハ不幸ハし
て、寛文六年の四月世と早うしの、故ハ翁ハ君臣の
内風雅の縁ハとゝまらぬ、數のあまり、遺骨を負く
高野山ハ登り、報恩院ハ納く六月帰國をその後今を
うに遁世の志ありてや、三君ハ仕へるはと告てゝ、ハ
暇をこい申さるーをあつくもしまりしゆるハ其秋ハ
ちん同僚孫太夫といふ者の門ハ短冊を粘けゝ「雲と
つゝ友や雁のいさゝ」と一句と残し國を去る

歴代滑稽傳 許六撰 芭蕉翁桃青ハ伊賀の産江戸ハ居し

て俳諧ハ鳴る、桃青二十寄仙といふ俳書と皆、二十寄仙場
吟の内、艪声波とうつて腸永る夜ハ涙子とおゝふ鯨の
其声ゝ〳〵「升一文二の弦ハ宵よりくゝそ牛房と刻
む」前後名を出しゝる撰集ハ二十寄仙一部く、談林の
時俳書ハ長し日々向上ふすゝあげ、終ハ談林と見破り、
はじめて正風体と見届、躬恒貫之の本情と探始て道
の辺の木槿ハ馬ハくをれゝと申さんゝ、天下挙て俳
諧中興の開祖、正風の翁と称し、侍る、天下の門人數千
人のうち、嵯ハ正風の体と得ゝるもの少し、初懐紙の項
杉風、嵐蘭、其角、嵐雪曽良ハ江戸ハ在て隨仕ハ其
ゝゝ故郷伊賀ハ立帰ゝる道の紀と草枕とも野ざらし
の紀行ともゝ大津の千那、尚白、青亜、三人師とし、ゝむ、
辛崎の松ハ花ゝ朧ゝ此ときの事く名古屋ハて
野水、荷兮、いらこの杜国冬の日の俳諧と撰し、次の春
春の日ハつゞき曠野ハ俳諧と勸む、風体冬の日春の日
ハ初懐紙ハちゝし、曠野ハ俳諧ゝゝらゝ〳〵て少しかるし、
大垣の加行、荊口ハの門人招て師とし頼む、野ざらしの
紀行の時ゝり、其後奥の細道の時大垣ゝり伊勢迂宮

とゝゝに別るゝとて蛤の二見へゆき行秋ぞ又江戸に
帰りて諸門人に正風の躰を勧む又洛にのぼりて去
来史邦元兆ホとまりめ初ぞゝ猿の小蓑をゝ
と吟ゝ猿蓑と起せ膳所の曲翠正秀珍碩ホと
導てはさこの俳諸あゝ大に趣き猿蓑ふくめし
その後江戸に帰りて深川芭蕉庵と再びむすぶ許六
此時ふまゝも珍石江戸に来りて深川集の俳諸と
撰を楽みの挑灯もゝて朝風冴ゝゝる星川の
橋愚老が俳諸四五年の後はゝまかるうゆゝる申
されゝ支考桃隣ハ随仕して江戸に下り桃隣ハ江
戸に止り支考ハ松島象潟の旅に趣き葛の松原を
撰を野坡利牛孤屋とゝのゝしく炭俵出来ゝ
又江戸にて保生庵圃と勧め續猿蓑と手傳して伊
賀に帰る杉風餞別に別座敷と云俳諸あり下巻本朝
文鑑芭蕉翁終焉記其角云此翁孤独貧窮まりこゝ
ども德の風雅をとめゝ二千余人の門弟ありて夷洛
ひとゝに合信をる因と縁をの不可思議いとゝ勘
破をゝゝ天和の頃ゝらん武江の草庵に急火の難に

かゝまれ潮に流るる笘をとりぎて煙のうちに生のびゝん
是ぞ玉の緒のゝゝかゝきゝゝめるゝ爰に猶如火宅の
愛と悟り應無所住の心を発ちて其次の年ハ甲斐の
山里に身をゝくし富士の雪のゝつもるゝバ三更月
下入無我ゝゝゝん昔の風もゝつゝかゝゝゝこの人ゝ
嬉ゝゝて焼原の旧草に庵と結びゝゝゝゝゝゝ
むゝゝ便りにゝゝゝ株の芭蕉と植置て盥に雨と聞夜
ゝれゝゝその世にそれ時の吟ゝゝゝ入ハゝのゝゝ芭蕉翁
ゝも喚ゝゝゝ下巻此記ハ枯尾花集にあゝて世に流布ハ此記ハ支考と對論あゝゝる再案あるバ因ゝゝ
惟然坊手記云翁難波にく芝柏亭に一集まゝゝ約諾
ゝりしゝ數日重食ゝゝゝゝゝ故に労りあゝて出席ゝし
発句のゝゝ贈らる秋深き隣ハ何をする人ぞ此夜ゝゝ
腹痛の氣味にて泄泻四五行ゝ世のゝゝの泻ゝらんゝ思
ひて薬店の胃苓湯を服しゝゝゝゝゝ驗しゝく三日
朔日二日とゝゝゝゝしゝ次弟に度数ゝゝゝゝて終ゝ
かゝる愁とハゝりにゝゝ惟然支考内議ゝゝゝゝる良
醫ゝりとも招きこい半と申ゝれバ師曰我本元虚弱ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ醫に見せ待ゝゝて藥方いゝゝゝらん我性

木節あらぐ知るものあり、願くハ木節を急ぎよびて見せよぐらん、去来も一同ふよびあせ談をぐことも有ふ
ぬぐ、ぬぬ、ぬ、消息とおろぐ〜ことあり、夫より両人消息をもちこめ、京大津つぐつかしくる、然るふ之道ぐ
亭ハ狹くして外ふ間所もなく、多人數入こゝて保養介抱もあるまじくとて、其所此所と立廻り、我知る人ありこ御堂前南久太郎町、花屋仁右エ門ら方ふ者の裏座敷とかり受ける間所も數ありて亭主ッ物數奇ふ奇麗こ、諸事ふ勝手ふあるし、其夜直ふ御介抱申て花屋ふうつるひろ、此時十月三日こ、四日車庸、畦止、舍羅、何中ホハ師の不例とまらぐ、之道亭ふ至りしふ病こるく事と聞えぐて花屋ふまゐる、病氣不虫損ふつゝ、問の人こるとも、ぐるふ坐席ふ通るほど張紙と出ま、且仁右エ門ぐ断ると云云三日廿七行昼夜こ天気くもる、夜半過、去来きこゝ、二日朝の状、三日の朝とく〜、其座より直ふまゐる、伏見ふ出しハ巳の時ありし去る舟ふ乗八軒屋ふ著しハ亥の時ありしとぐ、直ふ御病床ふ参ぐとうしふ、師も嬉〜こ胸ふせまり、ものゝ宜ハぐうしぐ諸國ふちるゝし人々ハ我と親の如く思ひのふふ我老ぐれて優〜きこともあれハ子の如く思ふ事あるく身更汝ハ骨肉とりけし思ひあるぐ、三日見さるぐハ千日のおもひせりぐ、ぐるふ此度かゝる遠き境ふて難治の憂ふ罹り、再會あるまじく思ひ居ぐし、ふ逢見るとこの嬉しさもて袂とちりあ〜ハ去来ぐ、ぐう落るふこゝぐめぐひて云、僕世務ふ[illegible]ハ、さぐる實意も尽さぐるふかゝる御懇意の御意とかう ふる事、生と隔つとも忘却仕らぐ、數行の涙ふしぜぐ、何様賣薬の効驗心もとうして、去来又消息さるぐ、たゝめて飛脚便りふ木節ふつゝ[illegible]、

[支考手記]云同三日の夜子の時おひつぐきて木節来る、二日出の両人の消息その夜著せ〜ぐ、大津と丑の時ぐろ、一番舟ふ乗りしゝ短日故遅著、諸子ふそこ〜ふして直ふ御容體とゝぐ、御脉と診ぐ、壬方逆挽湯と調合ぐ、四日朝、木節申さるゝふより、朝鮮人参半両、道修町伏見屋より取同じ〜包香十五袋ぐる、天気ぐ、之道ハ、ぐう世話ぐて、洗濯老女と備ひ師の御衣裳その外連

中の衣裳とそゝぐ、園女より御菓子を水仙を贈らる、支考、惟然介抱、次郎兵衛とても手届く処之道取計ひとて、舍羅呑舟と云ひの来る按摩あごうけこゝろ今日三十余度ふ及ふ度毎ふ裏急後重こ、次郎兵衛手記云五日朝丈草、乙州、正秀来る、天氣曇る、寒冷甚し、時候の故ふや師時々悪寒の氣あり、次郎兵衛天満ふ詣く昼もぎ帰る、今日師食しるべ索麺二箸こ、夜中迄ふ五十度ふ及ぶ六日天気陰晴きまゝ朝の食乳面三箸前後よりすぐら寝入ゐぐ、ちぐらく睡眠し給へ目覚より去来とちく召して光の頃野明う方ふ残し置し、大井川ふ吟行せ一句「大堰川波ふ塵あり夏の月」此句あまり景色過るとゞ、夏景色いひうへくうく思ひ居うしゞ清滝ふて「清滝や波ふちりこむ枯松葉」と作さし事柄ハ変りうれど同案ふうと入いそんもつぐまんで、大井川の句ハ捨てづらんと汝ふ申しうとうふ頃日園女ふ招られて、そゝぐへの目まて〳〵見る塵もなく〳〵と吟じて、是まで同案ふ似て句の道をぢ同じ夫故前の二句と一句ふ捨て、白菊の句と残し置んと思ふく

汝ふ意いうん、去来涙とゝぐ、名匠のかく名を惜ミ道と重じ給へ有ぐさよふ、句一章ふさまて千辛万苦しまく御病悩の、の御骨ふ風雅の深情こを事と〳〵眼あるもの何者ふ此句を同案とうぐ恐ちゞらい此句を同案同意ふぐ〳〵申もものハ無眼人と申者ふ、その故ハ此句々景情ふ備ふて、句意と見る時ハ三句とふ別ふく我ハ句の意と目ふ見て句の姿と見ぢ、青苔日厚自無塵是隠者の高儀とわめさる語、園女いまぐやうくして陌上桑の調あると思ふ〳〵言ふと妙こ語と妙まう、世人此句をとうるとも、園女ふ清節とらぐらんや、波ふ塵まう一の語ハ左太仲ぐ必非繇典行、山水有清音とうる絶唱もおもゝ園女ふ二夫ふまこと之さる貞潔と大井川清滝の絶景と二句の間相〳〵この〳〵て感じても餘りなくと申せ一人、師も機嫌よくなし、けり去来手記云七日朝〳〵不相應の暖気ふ雲〳〵て西ふし、菓方逆挽湯ふ加減、又乳麺どらの〳〵園女ふ見舞と〳〵菓子ホ贈つて来る鬼貫来る、去来應對〳〵て還を、園女何中渭川来る、去来支考會釈

を、終に藥とめさで、終日くゝる夜に入て晴る人音も
静かなるまで、灯のもとに人々伽し居こう、乙州、正秀
ホ去来に申しるゝハ今度師の御泉下の客となるせ
給ひ、此後の風雅いかに成行もづらん去来黙して居こう
しが、我も其事心あこうしし故、二日の消息こゞきしやえ
斯いとをぎまゝ有こう、人々も左思ひあつやさあゝ今
宵閑静に、只今の体ホ如ものしはらくハ、御快復覚束ふし
滅後の俳諧ととし奉らんとておづらに枕上ホうかゞひよ
つて、機嫌とそらひ問申しゝう、翁次郎兵衛ホたゞ
けをきれ、息つきあひて日、俳諧の寂化究まひしまつ
まで真草行の三をそなふまで、其三より千変万化
まで、我いまゞ其書とめくるまで、汝此以後とても地を
そなふることあれ地と心ハ杜子美が老と思ひさひハ西
上人の道ともさひ調ハ業平が高義とうつしいつまで
も我を世ホあらしかゆひ、ゆめ〳〵他ホ化せらるゝまつ
まいひしことをまもるべしと損口のまゝ喘ぎかひ
ゝるまでハ呑舟御口もとうるおつを又薬ともわらせてもつ
もつゝ、おのゝ筆を執こ是と書とて、惟然手記云

八日天氣快晴、御不食ゆゝ、京の出損士来る信徳より消息
とゞて御病体を問、近江の門上より使来る人々勝手の
間ゆて今度の御介労平復ゝ祈奉らんとて、住吉大明神
ホ連中より人と立べしと去来申しるまばおのゝくまつる
べしと、之道次郎兵衛闌にゝて社務林采女方ホ祝詞
とゝのこ厚く神納の品々贈らる、奉納「峠こまも鴨のさ
ゝやも諸きゝひ丈草「木ゞらしの空見ゆるも雀の声
去来「起ゝゝ声もうまつき湯婆うれ 支考「只ゝうホ
竹のゝゝやゝとそさゞい 惟然此外連中の句あり暮之 大勢の集会ホ
つゝゝまハ悦ひ奥じく師をあぐさるゝ、木節去来ホ申
ゝるハ今朝御脉をうゞひ見申ホ次第ホ氣力もおこ
ろくのゝとゝろゝく、脉体ゝろし、最初ホ食滞ようゝこ
泄泻ゝるとも、根元脾腎の虚ゆて大虚の癇疾ゝり、故ホ
逆挽湯主方ゝり尚又加減して心を尽をとゝどこ藥
力とゝゝゝこ願くハ治法と他醫ホうゝめんと思ふ去来師ホ
申、師の日本節の申条ゝもゝども、いゝある仙方ありく
虎口竜鱗と醫をとゝゝ、天業つゞせん吾ゝく悟道しを
ゝバ我呼吸のうゝゝん間ハゝつまでも本節が神方と服

せん他ふかとおもふる心ありどのくまゝ支考乙州ホ去来ホ何ゝ申きれバ去来心得て病床の機嫌ようひて申して云古来より鴻名の宗匠なりく大期ホ辞世あり、さゝどうりの名匠の辞世ハふるうしやと世ホふるめある べし、あなた一句を残しあるべ、諸門人の望ミ、且ぬべ〳〵、師曰昨日の発句ハ久人の辞世々ふの発句ハ明日の辞世吾生涯いひ捨し句々一句とゝて辞世あらざるハあ〳〵か〳〵我辞世いうわとゝふ人あ〳〵ふ此年ごろいひ捨なをし句いづれあるとも辞世ありと申給ふ〳〵、諸法従来常ホ寂滅相これハ是釈尊の辞世ありて一代の仏教此三句より外ハ古池や蛙飛こむ水の音此句ホ我一凡を奥きゝまゝ已めて辞世〳〵其後百千の句を吐ホ此意ホらざるいちゝ〳〵、らゝを以て句々辞世ホ〳〵ざるハあと申〳〵次郎兵衛ガ側より口と潤ホふゝとゞひ息のうぎう語つゝろ〳〵、支考手記八日夜ホ入て嵯峨の野明為有より粉を贈り来る消息ゝふ今日まで伊賀より音信ふ〳〵去来乙州申談しつゝごと飛脚を立てきよう師ホ申ゝれバ師の曰我隠道の身として、虚弱ある身い数百里の飛杖おりひ立親族

よりとゞめ〳〵ゝとどあゝろのあ〳〵ふせ〳〵ふ我過ふり、今大病と申ゆゝりあゞ一類中ゝゝゝゝゝゝゝ殊ホ生ホの聞しめしもおゝとゝあり、ゝゝ此度ホ切ハ及ゞゝゝゝ沙汰有まゞゝ宜ひゝゝ、師の慮ホゝゝゝゝゝ感心を、度数六十度ホ及ぶ惟然手記云九日諸子の取ゝらひとゝて古き衣裳又夜具まゞの垢つゝゝゝる不浄あるを脱ゞし、よゝき衣ホせゝまゝあらも、師曰遠地波寿のほとりホ草を敷堀ゞ枕として、終と取つゝゝ身のゝゝる美ゝゝゝ褥の上ホゝゝゝゝ未来ホでの友ゞちホゞくゝゝつゝゝゝひ、鬼録ホ上らんゝゝ受生の本望ホり、昨夜目のあをゞるまゝ、不斗案し入ゝく呑舟ホうゝせゝりおのゝく詠じあゝ旅ホやゝゝく夢を枯野をうけ週る枯野をめゝる夢ゞゝゝゝゝゝ侍らゝゞれあゞゞゝゝゝゝれ辞世ホあゝゞ、辞世ホわらざるホもいらゞゞ病中の吟ホりゝゝかゝる生死の大事ゝゝ前ホ置あゞゝいゝふ生涯このゝゝ一凡流といひあゞゝゝこれゝ安狐の一ともゝゝゝん去来ゝ左ホあゝゞ日々朝雲暮雨の間も置ゝ山水野鳥の声も捨ゝあゝゞ心身凡雅ホらゞゝらホゝ、河魚の患ホつゝゝものひゝゞゝゝいまのゝゞゝふ

其風神の名章とぞ諸門葉の悦び他門の聞
え示代の亀鑑ぞと、感涙ぞ、眼あるものの
是と見ば魂を飛さん、耳あるものこれを聞ば毛髪これが
為ぞとぞ、列座の面々感慨悲想して慟絶し声を、
こそ師翁一代の遺教経に、此日より殊更ぶおろ〳〵ぞ、
度数をまぼ、去来手記云十日初時雨せず、師夜の明ぬ
より度数をまぼ一入ぞ〳〵ぞ、折節ぶ諮言あり、
取ぞあるべきことなれし、木節此日芋葉湯をとる、諸子ぞ
より食事をぞまゐらせ、ぞ、ぞ、梨実を
のぞしぶ木節ぞ〳〵制し、ぞ、ぞ、ぞ望ぶ
故止ぞをえぬ、ぞ、ぞ、ぞ、ば、一片味ひてゆく〳〵脾胃う
くる所ぶ、死期ぞ、ぶあるとぞ申の下刻ぶ至て、
人心地付ぶ今日ば少も食しぞ、惟然手記云
十一日朝ぞ〳〵時雨を思ひぶけぞ東武の其角来る、
是ば東武のぞ、ぞ、同伴ぞ恭宮の亭和州紀伊ぞ行
やぞ泉州より浪華ぶ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、
聞つけぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、直ぶ病
床ぶ参て皮骨連立しぞ、ぞ、ぞ、ぞ、休と見まゐらせ、且

愁ひ且悦ぶ師も見まゐらせまで、唯涙ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、
其角をぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、

おのづから日向ふむらごり居るふ人々繁あて蠅をさ〜
るるふ上手下手あるを見るひておのづから奥ふ入るひけ
るを〔ご大病中のをまれば忽ち倦〕みるひて直ふ寝所ふ入
るへ支考ハ師の蔑句と滅後ふ一集せん心願あれど此
ころの病苦ふあるをもふふ見合せ居るしふふ機嫌
よるふ乗じて申出侍らんと申しるるを去来ふて
師の心中を知るし故ふ大ふ怒りそぎの〜きこと申
るの〜ゆえ師ハ平生名聞らき事ふこと給ハぬ今日漸
く快き体を見うけもづて諸人られと思ふ中ふ御
気ふさるふことを聞せ申てを御心を労〜め申ことを
奇怪ふりふこの後御床ちかくよるふ早く其座を
立るへと声あらくふ次の間ふ追立るる支考もちらぬ
ものひ出して諸子の聞前面目とう〜もへ〜ば往々
惟然ふ打むひ我ふ句ありそこ書ものといひて〔ちら〕
もて次の間ふ〜ろ寒うゆえ支考〔ま〕さすぶ支考もりれば
師もりのきこゆひてをく〜かりのひるり〔闇〕とりて菜飯
たるまる夜伽ゆえ木節〔ニ〕子子ふり蓑虫寒く鳴尽
も〔ひ〕州〔う〕つくまる薬のもの寒ゆえ文草〔吹井〕り

寵とあねのんをつもるを〔其角〕一々惟然吟声〜れむ師
文草ゆ句を今一度と望とるひて文草出来るをうつ
きそもさひもをうとのひるり面白しとおもゆ〜て
声もてほめるひるり〜ふふをうし師の機嫌のうるし
きを悦びるるふ木節一人愁をいどるる体ふをえられば
其角この故を問木節云病ふ除中の症といるるあ〜病
中絶食あるふ俄ふ食のをむとあるハ〔虫〕損症〜〔死〕期遠き
ふあらぬとのくりさいちるぬおのくをあさ居るふ
夜半ごろより又寒熱往来ありて夜明ごろより顔色
土の如くををひちづく〜ハ〔悶〕乱しへもをりくまを
ざうしゆ良ありて又實痢ふるりるひ左右ふ舎羅呑
舟らしろより次郎兵衛抱きまるあらせて介抱しほど
あく夜明ゆ〜ハ十二日ありかひてハ閉こもりるひ〜ゆ
ゆゆこの障子もふをまを取をまを去来其角大草
をこを〜と招きるひ〔鐵〕ををづゆ〜ハ思ハ〜をるをを
こわり行水ごのをこをるふ木節もきりふ制し申を
ごもふきりふ望をるゆ〜ゆ止ををえぬ湯をまるらせり
座をもづのふあらをあ木節り醫術と尽されをを

あどつとゝくふ謝しゐひさて三人の衆どもゝく召れひ
州正秀を左右ゝ、支考惟然ふ筆ゝうせあきと跡のと
こまぐゝと遺言しゐふ病苦をこもゝとゝあらば人々
奇異の思ひをあらゝ、伊賀の遺書ハ手づら認め
ゐひ、京江戸美濃尾張ゐまざるゐゝ遺言ゝゝゐふ
門人筆記ゝ次第ふ声ゐゝう疫喘中虫損ゐひ々ゝハ次
郎兵衛湯ゝて口をうるゐしまゐらせゝう良ゐゝく
去来ふ枕ゝひゐひ先ゝう賓永阿闍梨ゝう路通ゝ事
仰ありゝこの後汝ゝ丈草乙州ふふ贈りし消息露霜ハ
捨置ゝ併ゝゝゝうるゝゝゐりて雲井のゝゝふいはし侍
うゝゝ数年の薪水の労ゐゐゝくゝゝたに置ゝ我ゐゝ跡
ふいゐゝふ見捨ゝゐゝ、風交しゐくゝゐとたのゝ侍る諸
國ふも傳へゐゝゐゝゝゝといひ終ゝゝゝひて餘言ゝ合掌
正しく観音経ゝ聞えてゐゝふ息のかゐひも遠くゐ、
申の中刻をゝて埋火のゝゝゝまゐゝこひゐゐ如く次郎兵衛
ゝ抱きまゐらせゝふよりゝゝゝく死顔ゐゐゝく眠
れゐゝ期ゝゝて物ゐゝけゝ、時ふ元禄七甲戌年十月
十二日、御歳五十一也、即刻不浄をきゐゐ、白木の長櫃ゐ

収めまゐらせゝその夜直ふ川舟ふて伏見ゝて御供し奉る、
其人々ふハ其角去来丈草乙州正秀ゐ木節惟然支考之
道呑舟次郎兵衛以上十一人、花屋仁右ゝ門ゝ京一荷物を
送る体ゝて長櫃の前後を取まき念仏誦経ゐゐひくふ供
養し奉るハ幡を過るゝゝゐ夜もゐゝくゝ明ゝゝるふ、
僧李由の下ゝてゐゝる舟ふ行あひゝゝバいゝゝて乗ゐゐ、
相とゐふゝれき物ゝくゝしてゐゐゝふく京橋ふ着、夫より
狼谷通りふゐゝり、ゝもゝふいゝそく程ふ十三日巳の時まゝふ
大津乙州ゝ宅ふ入奉ゝゐゐり、御沐浴ハ之道呑舟次郎兵衛
ゝ、御髪の伸ゝせゐゝゝ、月代ふい丈草法師ゐゐらせゝう、御
法衣淨衣ふハ智月と乙州ゝ妻縫奉る淨衣白衣ふて召
ゝゐまゐらせゝきゝ、翁ハいゝゐゝゝゝふゐゝゝて茶色の衣
装ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝて茶色と召ゝゝゝバ智月尼のゝゝ
らハゝて淨衣も茶色の服ふせられゐゝゝ葬式ハ十四日
ありゝゝ終焉記云湖南の義仲寺ふ棺と移ゝて、道里遠
境の名を傳ゐゐ人ハゐゐゐゐゐゐふゝゝ世来りて凡三百余人
ゐゐゝ墓ハ木曾殿ふゝゐゐふて、おのづら古ひゐる柳も
あれバゐゐて、ハ終焉のちぎりあるやとゝゝふ野面の無縫

塔とま孔びわら垣ともなし、冬枯の芭蕉と植て其名の記念とハ、あせりなり、實ふと所ハ、ゑぐら山や音羽の峰もちろんなれ、鳥のさゞ波も爰ふよせて、漕行舟も觀念のくるよりあらぬ、樵路の鹿田家の窟まべて湖上の月ふ映じて此廟前の風景とあるべ遺骨も永く此地ふ清らんさらばそのさゝひもるゝふくわども遠く風のこゝろふ我翁ともさりん人ハ爰ふ此記とのて回向の便りとぞ

以上考證ともあらぬ書どかゝり抄出も、小文庫

芭蕉忌と申ものゝ三回忌　史邦

初雪、初雪消　初雪ハ積らぬさゝめふゝ

も故ふ消るといひても冬まり○

初雪見参　公支　根源

初雪や水仙の葉のたゞむ迄芭蕉

むゝ初雪のふる日、群臣参内し侍るを初雪の見参と申ゝ、桓武天皇延暦十一年十一月ありたゞまる、初雪ふるぐらぬ深雪の時ハ必諸陳見参ともるあり、此支絶て久し、

初霜　霜の注ハ〜の部

る

初時雨　同

べし、

初氷　同

初見草　冬菊の異名も、

藏玉　ものゝ庭ふゝ〜も初見草花さきあり霜や置ん、

兼三冬物　腹立

鯛　ふの部河豚の条注、

そゞれ雪　真洲翁云そゞれふゝぐら

のこるらぬ霜ふ、とふ同じ、ゞ兼ハ雪もそゞれとよむ、

賣炭翁　炭賣とつゝあり　韓琦廣陵大雪詩　習鑿臼江

曳氷透蓑賣炭翁、野翁泥没輪、

鵠　鶴、負雀、和名たゝ、俗云たゝ

たゝ、和名あのり　鷹ふ似て小き物く鷹の雛ふハ別種あり遍身鷹の如く黑き斑あり腹ふ黄黑の斑ある理あり赤白斑ふ交る者あり又胸腹灰赤色ふ黑赤の斑を交へ背紀ら黑く光を含び者ゆゝ、

隼

鶻鷂音梅　鶻音骨　晨和名ハ定布佐　張九齢曰鳩と隼と雄を鷂とゝふ蓋鷹ハ伏〜くるゝと擊らぞ、隼ハ胎と擊ぞ懷胎の者ふ遇ふときハ輙ち放て殺さぞ鶻ハ鳩鴿及ひ小鳥と擊以て足と幾ゝ且ふくこれを鷂と此鳥東ふ行ときハ是日東ふ往て物と擊らぞ西南北ときゝ然り此天性の義ゝ隼ハ状ち鷹ふ似て蒼黑胸腹灰白ふ

して赤と帯其背腹斑の文あり初毛ハ白し

くまぞ毛と易て後略鷹と同じ全体鷲鷂似

十一月

鉢叩くの部空也忌の条り注を、袴著かの部髪置の条ふ注を、初鰤

六月五六寸津波須といふ夏のつの部つくものの条ふ

くぐし、和漢三才高会仲冬長じて三四尺最大ふるもの

五六尺鰤と名づく、腦として冬春ことと食ふ脂多く

味厚し丹後と上ことまで此少きよりう老ふ至る時名と改む

初ハ江海ふあり、徐大洋ふ出ふこと東北の海より連行し

て、西海對州ふ終る、出世昇進の物これを大魚と称

貴賤相饋して歳末の喜祝とも、初深雪

十二月

貘

の枕、貘の札 説文貘ハ熊ふ似て黄白色力多く鐵と甜て千斤と消て其皮

温暖ふり故事要言節分ふ貘と云獸の形ど画て枕

ふ敷む悪夢と見ずして俗ふもるるる、俗ふ貘を

夢と食ふ畜ふ

早咲の梅椿 梅椿の両種特ふ早く咲出るあり泉州堺の浦の人十月梅椿を京師ふ贈

る、茶人特ふこれと翫ひて茶寮の観とす、晩歳

月令廣義蜀の風俗晩歳相餽問、これを餽歳といふ、春の隣藻塩草春の

隣歳の暮ふり、

但し晦日ふ限らざるの古今俳諧哥冬ふ春と

くの隣の近き色ハ中垣ふりぞ花ハちりて深養又

急ぐ、春と待、春近き歳の暮の姿情

兼三冬物

鳥 大和本草鴆字彙曰好で水ふ入て食ふ鳥ふ似て小ふ又本草ふ載くる鶻鶻もこれ

順和名抄ふ二ホと訓ス俗ふ鳥の字と用ふ鴆と鶻鶻

と一物二名狄本草ふ鶻鶻大さ鳩の如くして鴨脚

陸行ことあたはず常ふ水中ふ在て人至ることし沈む貞享

式鳥ハ鳴声も寒気ふ応じ、俗諺ふハつぐりともつぐんだ

俳諧ふハ名目の自在と称して冬ふ用ゐ春ハ用ふべき

ふり○鳥の巣ハ夏煮凍煮るものの凍ることく、

夏の部ふ入べし、胡蘿蔔

時珍曰胡蘿蔔元の時始て胡地より来る気味蘿蔔ふ似さり故ふ名づく、

十月 新嘗祭 中卯

公事根源 今年の初稲を神ふ奉らせ給ふ、御代の始めふい大嘗会やい八年毎のそぶし新嘗会といへド食の人々

庭燎 加摺衣日陰と者を、用明天皇二年四月ゟ始む、

部神楽の 錦の帽子 この部鷲の棄条ふ注を、新玉津島火焼 十三日 俊成卿御請之五条の南烏丸の西玉津島町ふあり

紀事 昨今冷泉家多く糸詣を或ハ法楽の和哥あり、凡この門前一町ニと云へ〻此社の氏子多り今日市人神前の御酒を冷泉家ふ献る時ハ酒食を賜る、

雞乳 うの部鶺鴒巣と云へ〻とつる条ふ出ッ

十月 法勝寺大乗會 昔日より ○當寺ハ

廿八日まで 白河法皇の皇居あり、その後天台宗の住持聖道衣あり、後醍醐帝の勅ふよりて律衣とある、今寺絶て岡崎村の數中ふ諸堂の跡残ル、九重の塔の跡村の南ふ河ア塔檀と号て、糸櫻の名所あり、風雅集浄妙寺関白立よ〻で過ぬとおもひ糸ざ〻心あるる春のふの糸

一説ふ當寺ハ南禪寺の西北、新黒谷の南ゟ北の地ハ白川の大臣忠仁公の別業ゟ、寺ハ白川院の御願ゟり、當寺の九重の塔浪速の浦ゟ〻ゟ〻ふ、

無三冬物

摺 とく〻せと 材ふ伐て取る木根と掘出し〻るものゟり、関東ゟて根骨しゟふ山家女冬の〻ゟ炉ふ昼夜〻る〻と焼く寒と凌ぐものゟり、

糸切歯 ふ摺ハ昼夜おくものふあ〻ゟ、灰とおゟひ埋火と〻、夜明ゟ迄寒と防ぐ用と、

干菜鉤 干菜ものゟ、蕪菁の巣菜を採て簷下おろけ、陰ふ乾を、喚て懸菜と号、

十月 報恩講 御仏事 御講

廿二日ゟり廿八日まで ○親鸞上人の忌日ゟり上人ハ内九の後胤、藤原の有範の男、伯父範綱養ひて子〻〻字ハ善信坊、名ハ綽空又範宴と更め、初め慈鎮と師〻〻後源空の弟子とふる、弘長二年 十月廿八日

寂と年九十二浄土真宗の開祖なり、東西本願寺十月廿二日より廿八日まで報恩講と修す、京江戸在家宗門の徒、参詣群集す、或は御霜月と称す、又御講とも云ふ、昨今時として天気快晴あり、俗ふるまと御講明とも云ふ、

十二月 星佛賣

十三日 紀事 此月十三日大佛師 未年の属星の形を彫く

禁裡ふ献ず、民間にも亦この事をなす、故ふ人家各星佛を買て帰依の僧を請きてこれを祭る、故ふ市中星と賣者あり、所謂日曜、月曜、木曜、水曜、火曜、羅睺、計都の像なり、

冬瓜

時珍曰冬瓜其冬熟を以てなり、貞享式 此名は俳諧の自在なり、冬瓜と音ふをび、或はうりと訓ふ、中古は総て秋季とふせり、さるに冬の一字より霜を待て賞する物なれば西瓜を秋とふせる加減なり、東福寺開山忌 聖一

冬瓜と冬と定むべきなり、

忌と、その部ふ注す、

兼三冬物

鳥叫、鳥立を慕

たの部鷹狩の条注、海鼠ふの部生海鼠の条注、

十一月 冬至

朔旦冬至 月令廣義 大雪の後十五日、斗子ふ指す、一陽の嘉節 冬至子十一月の中、陰極て陽始て至る、日南ふ至る、漸く長く至る、玉燭宝典 十一月子は建す、周の正月、冬至日南ふ極て景極て長し、陰陽日月万物の始め、律黄鍾ふ當る、其管最も長し、故ふ履長の賀あり、○朔旦冬至、李吟云十一月朔日冬至ふあるとき、ふり、世年ふ一度まれなるものなり、瑞祥なり、其日は天子南殿ふ出御ありて、旬を行せらる、公卿賀表を奉ることあり、○一陽の嘉節、李吟云、十月は無陽の月、冬至ふ一陽来復ぜり、孝経の説ふ冬至ふ三義あり、一は陰極るの至て、二は陽氣もじめて至る、三は日南ふ行くの至て、故ふ冬至といふ、

童女御覽

との部五節の条ふ出ず

豊明節會

小忌衣 日蔭蔓 日蔭糸 心巣

江次第 新嘗会裏書云、毎年十一月中の辰の日行之、豊の明の節会是、天子新穀を嘗む、故ふ新嘗会

とゝ云云 公事根源 今年の稲と神に奉らせゝて、今日君もきこしめし、臣もたまふ故に節会行はる新嘗の祭てゝる、上卿、宰相、辞、小忌衣と著る、余人は諸司の小忌と束帯のうへに著ゝると、々ゝいるゝゝ青摺と用ゝる、上卿宰相辞の上首と勤む、南殿の廂に元子とまうけ、内辞已下座あゝく、白き酒黒き酒の盃とゝり、大哥の別當ゝゝゝゝて舞姫のぐゝり、五度袖とゝるゝゝてゝゝゝゝ入、事に堪ゝる上達部五節所とゝゝひて催馬樂ゝとゝゝゝ節会の儀常のごとし下畧○小忌衣袞服小忌の青摺、小忌の袖、山藍の袖、或記云小忌の文竹桐夏は堂ゝも冬は堂ゝゝ舞人と奉る時拜領すとゝゝゝゝ年少の人は私にゝゝと調へ著用をゝゝに大嘗会豊の明の節会に用ゝ件の節会に小忌の袍と著用も其時闕腋の如し、但身一幅ゝ、狩衣の寸法と用ゝ又白き袍を粉張ゝて藍とゝり、後に堂ゝ、裏ゝ、只一重ゝ又小草、柳、水草、蕨蝶小鳥に心山藍の葉ふゝ摺又諸司小忌とゝゝゝ、建暦の度麻布麁悪のものゝ、和訓栞 小忌はいと暑き、大忌に對も、此大小は麁細とゝゝ○日蔭蔓、日蔭の糸 和訓栞 延喜式に日蔭の蔓とゝゝゝゝ、古事記に天の日影とゝひ、神代巻に以蘿為手繩とゝゝ、松蘿一名女羅是ゝとゝゝども別種ゝゝゝ、今狐のとうせをいゝ物是ゝ、新拾遺に玉ひゝげともよゝゝ、大嘗会に用ひさせゝゝゝゝ、式にゝゝゝゝく出ゝゝ、今白糸青糸ゝゝと組て冠の左右に垂させゝゝゝ、其表物ゝとゝゝゝて日うけの組ひゝげの糸ともゝゝゝ、さて盤戸に神のこもらせゝゝひゝゝ時にゝゝゝゝ日影さゝゝ出んゝゝと言壽てたもきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ、○心葉、和訓栞 大嘗会に冠の上に懸るものゝ、祭主にはゝは賢木の枝ゝゝゝ、神代の巻にその吉ゝゝゝゝゝ、桃花蘂葉に心葉は金銅の梅花ゝゝゝゝ萬葉集大嘗会のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ、今主上は櫻の挿頭にて造る大臣は藤に中納言は山吹、参議は梅ゝ、ゝゝに減金と用ゝ、

東三條の御神樂

かの部神樂の条に云、

採物歌

かの部神樂哥の条に云、

道祖神祭

十六日 指の刃天王寺領、天王寺村にあり、祭る所猿田彦命なり、

この日一村の童あつまり、往来の人ふ銭とゑひて祭礼の料とも、銭とあくさをぶ戯化ふ縄と以て往来と遮り留むようてこのことをもるもの、商買とつぐも今日此處と通らぞ、但堤の魚荷飛脚ハ故ありて道路をづらひ

酉の市 酉の日 伊豆國賀茂郡三島の駅ふあり、

鷄の町詣 酉の日 鷄大明神の社ハ武州葛飾郡花又村あり、江戸より三里 毎年十一月酉の日市と

つ酉の日三ッあれバ三日とゝふ市ふり上の酉の日と專ら江戸近在より諸人群集して甚ぞ賑ひ是當社神事の遺意ゝ土産ふ芋ゝらと賣ゝ糸詣の人必これと買ひて家ふ帰る、又此日浅草寺の裏手鷄大明神ふも此市あり、

冬至梅 和漢三才略会 單葉の冬至梅中花ふて紅ふ冬月ひらく、八重ふて花浅紅の者あり、

十二月 公事根源 大寒の日夜半ふ陰陽師土牛童子の像と門口ふ立ゝ青黄赤白黒の土牛を門々ふ春夏秋冬の色ふ随ひてうつる慶雲二年天下疫癘さかりふて百姓ゆゆく失うしゝぐ土牛を作りて追儺と

立土牛童子像 いつとてもぐまりき異國の書ふハ農事のゝゝふ時を示さんとて土牛と立ゝ

延喜式 土偶人十二枚高サ各二尺 土牛十二頭、

豆腐蒟蒻弱と永らも 製法 朝食鑑ふ

年忘 歳の暮ふ親戚朋友を會め宴を設く、と年忘とゝふ是年中の労を忘るゝ意、

年木撫 春用ふる所の薪を年内ふ撫置く是と年木とゝふ

月令 季冬之月乃命四監ニ収秩薪柴ヲ 又云孟春之月禁止伐木 注ニ以盛德在木也 然ハ春ハ木と伐らぬゆゑふ年の内ふ春の薪と伐ること 夫木 ゑあるこゝふこと

高島の杣山川の筏士ハ年木と積やそゝうん、

年の市 来春用ふる物と悉く賣るゝ 五元集 年の市ゝれをよゞゝん羽織ゝの 其角

年の終の魂祭 秋のゝの部魂祭の条ふ出、

年内立春

古今 年のうちハ春ハ来ぬ人ハ去年とやいそん
こゝろ〳〵とやいそん○貞徳曰年内立春和哥の題ハ春の
部也、代々の撰集ハ巻頭ハ入 年の暮 ぬる人
らゝ連哥ハ冬ゝ、俳諧又冬ハ用ゐ、
ぬる夜もあり年 年の終 古今 あらくあのこのこゝろ
の暮 芭蕉 ふるるこゝろ雪も我身もふり
まさりつゝ 年浪 新勅 こゝろぐるまたぐれて
在原元方 たやきこゝあくのよどまぬ
水ハまさりつゝも 続古 ちるくゝ松ゆゑ年の
ゆく道助親王 歳の末 末の松老の浪こそやもくく
こゝろ〳〵と 年の湊 春の湊ハ陣ぐゝ
領子内親王 へたるぐゝ、 年の際、年
の名残、年の冬ゝ、年の果、年みち 各字義の
如し 年籠 滑稽雑談 和俗大晦日の夜灵仏灵社へ
詣て年ごとるゝ、是を年籠と称ス諸
國ふるゝ也、其国郡の神社佛閣あゝこりゝ
京都也ハ伊勢熊野ゝ近くハ祇園清水愛宕

八幡ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

と云、

十月 智恵粥

たの部大師講の条ふ出、

十月 著

鈦政 公事根源 五月ふ同し、是撿非違使在京して制法と行ふこと、延喜式 凡罪人者随罪輕重、著鈦若盤脚、○頸ふ在と鉗こいひ、足ふ在と鈦と云、刑具あり、

り 十月 立

冬之節 素問注 立冬節 初五日水初て氷、次の五日地始て水る、後五日雉大水ふ入て蜃とふる、

ぬ 兼三冬物 偷立鳥ぬきう鳥

たの部鷹狩の条ふ出づ、

暖鳥

はの部隼の条ふ注す、

る と 十月

御影供 御会式 十三日 日蓮上人の忌日ゝ春の弘法大師忌を御影供とふ 御命講ふ紛ふ故おのゝとうとい〻えとめと通ず、影讀〻めんとするのゝ」日蓮上人人傳元亨釈書ふ載ず、日蓮上人ハ房州の人三國氏弘安五年十月十三日寂を年六十一後醍醐天皇勅して大菩薩の号を贈らる蓋洛北妙顕寺の妙実、両と祈るの賞ふ因てあるとそ武州千束郷池上村長栄山本門寺、こを終焉の地ゝ昨今宗門の徒佛檀を掃除し、紙ふて製しうる造り花とさ〻ゝさ〻し五色ふ染〻る餅と供ず○御命講や油のやうふ酒五升 芭蕉

御取越

一向宗門の徒此月親鸞上人の忌を修て忌日八十一月ある故ふ御取越と〻ふ、

大社神事

神集 十日より 和漢三才図会 神在 十七日まで 大社杵築大明神の宮ハ出雲國杵築村ふあり、大己貴尊、孝安天皇三十二年垂跡昔ハ宝殿高さ三十丈、今減して八丈、後深草院宝治元年始て三月会行ふ、○毎年神祭七十二度 就中保元年始て三月会行ふ、○毎年神祭七十二度 就中十月ハ殊ふ深秘の祭と〻ふ、十月十一日より十七日迄と齋と称て、この間風烈しく波あらき日、一蛇化度藻ふ乗て海濱ふ浮む人ことゝ〻れ〻ゝ国造へ訴ふその人ふ褒美あり、この龍蛇と曲物ふ盛つゝ国造神殿ふ納とゝふ、その蛇の形蝮蛇ふ似て、綫形の斑文連つゝ、又五色の彩色重ゝるゝ如し、尾先ハ魚尾ふ似て

岐あく屈曲して守賀神のとおぐし神祭第一の物なり、**尾越の鴨** 貞享式 此名多俗習に鴨は往来の道と定めて山の尾嵩より越る故なれば初鴨を秋とふし鴨こだうと冬とふせる名は殊ふ俳諧

兼三冬物

小野炭 山城国小野の里より出る

温石 大和本草 山東通志云掖縣より出色青白と兼ぬ潤膩玉の如し味甘く毒ふしし薬物ふ備ふべし日本ふ温石といふ物あり色白して少く青しやうくあり是山東通志ふまろせる温石と同物なる

落葉 この部木の果の条ふ併せ注せ、

追鳥狩 を

し〳〵草、落草、呼声 各たの部鷲狩の条ふ注せ、

鶩 どーの飯羽 和漢三才図会 其羽毛五彩にして頭ふ玄纓あり、頸ふ紅糸あり、背ふふき羽あり、摺扇の半開のごし、俗ふ剣羽と称せ九十月多く至る家々庭池ふ養ふ然も鳧鴨と同居せ、鳴

ハ蒼色ふして目の後ふ白き條あり、翅尾黑く腹黃ふ赤黑の紋あり、 大和本草 鳴雄相ふ愛して相離れず他鳥ふ異あり、東垣曰二其一を失へば朝夕思ひ慕ひ憔悴して死せ、昔獵夫弓を以て其雄の首を射切る其翌年又其水辺を通る時、雌一度あると射殺してるふ翅の内ふ去年射られし雄の首をいだきり、 新撰六帖 池うもむどーのつるき羽をぞ〳〵つまあらそへの けしきぞ〳〵も○思羽の證哥との義の条ふ

鴛鴦

皆 鴛鴦の姿の皆ふ似るといふあり古哥こやの池つばめどーの一つぶひ誰めぐ皆のうちちかうん

玉海集 どーの皆や張良ふ足 友直

鴛鴦の衾 西京雑記 趙忠燕皇后ふ、其女弟昭陽殿よりあり、飛燕ふ遺る書三云、鴛鴦の襦鴛鴦の被鴛鴦の褥云云 **壬二集** 霜〳〵どーの衾のおもひをを千世をうらめる病の池水○鴛鴦を縫ものふ、或ハ惠さるとどーの衾とも褥ともふあり、

十月 **大原祭** 中の子日 一年ふ両度のり、春のとの部注せ **小忌**

衣との部豊の明の条に注す、**大前張**かの部神遊哥の条に出ッ **御火焼**

庭火の遺風なり、此月諸社に於てこれを修す、○朝日智恩寺鎮守賀茂明神、○四日上出雲路幸の神、○八日所々の稲荷、これ先朔日に稲荷の氏子の児童、小き神輿を造り、朔日より市中を振て人家に入て米銭を乞ひ、これを以て八日の火焼料に宛ル、日の新御供八社家松本氏調進ものとなる、同日安居院有栖川の宮、並大坂高津の宮、王造り稲荷天王寺庚申、○九日貴船結神、○十日衣田の社、九条天神、○十一日粟田口神明、○十二日生玉、十三日三津八幡、○十五日所々八幡宮、今宮所々神明吉田岡崎天王並坐ノ社、○十八日上下の御灵、○廿三日貴船、○廿五日北野、その外神社毎に この月會日に柴と神死に積み、神酒を供し、夜に臣下のち火を投してこれを燎す、児童口々に某の神の御火焼と拍て、**帯解**この部髪置の条に注す、**御佛事**報恩講とこれの部に注す、世俗おぶつどとこれを増山の井にいふ、

御祭日の使 掛鳥 廿七日 春日若宮の祭なり、木社を後日の能 去ること一町ばかり平林の中にあり、法要集若宮御殿天押雲命と云、然ども若宮社家秘記とも、紀事南都若宮の祭夜宮 共日

興福寺の僧頭屋田楽あり、凡頭の僧一人両頭と云ふ、両人の義を兼ねるなり、長谷川黨春日の社に恭請、野太刀を携へ馬に乗て、遍照院の渡と云ふ、御旅所の前に於て流鏑馬あり、夜支の刻に ふ若宮の神殿に神幸あり、神楽訖て後燈燈を消し、社家各神林に擁護もて、もつして闇中旅所に迂し奉る、これに於て燈火を張て、音楽相撲に次第に「ヨ」と修す、当日廿七日にあり、式日あり、寛正年中ちなを定む、巫女及び伶人田楽申楽あり、供奉の僧奉行職人松の下鳥居の南の方に於てこれを行ふ、楽人上越後守騎馬にて供奉もて、是を関白代と云ふ、又陪侍楽あり、田楽芸術を施し、猿楽開闔とこれを松下開闔と云ふ、凡猿楽の始に、股太夫新に吉事の詞を作りて万歳を祝ものとなり、開闔の詞を云、

その後舞曲もてまる、金春金剛の両座太夫供奉の時、舟の立合と舞ふ、觀世保生両座の太夫供奉の時、弓矢の立合と舞ふ、大小の鼓と以てこれを指て、殿後ふ大和国と領もるの武家、各鞍置馬長柄の鎗を出し、奉供の行列あり、夜ふ入て旅所より還幸、祖神幸の義ふ同じ、〇日の使とハ関白殿下より奉らるゝ騎馬伶人是あり、黒袍冠の巾子ふ藤の造て花とゝるゝ、この祭ハ人皇七十五代崇徳院御宇、天下大ふ饑饉し三年又大ふ疫癘あり、関白法性寺忠通公、この祭礼の大願と発し、はじめて天下静まるふゝりて毎年行ふ、ゝゝ、保延二年丙辰九月二十七日、これこの祭のもてまり〇掛鳥とゝふハ春日祭のとき、鳥獸と以て贄とし、こゝと掛鳥とゝふ雉千二百五十六羽、兎百三十四耳、狸百四十二匹、是又保延二年よりもてまる、春日ふ先規より地侍ゝて六波あり、平田、長川、長谷川、葛上、乾股、散在奈良の大宿所よりあつまり、掛鳥の事を主るあり、〇後日の能とハ春日祭の翌廿八日ふ、能樂と施まとゝふゝ、夫つ前日旅所の前ふおいて、流鏑馬伶人の舞相撲細男舞田楽ありて又翌廿八日猿楽あり、故ふ後日の能とゝふ

十二月

弟兒の朔日

乙兒の餅

一年中の朔日の終あり俗ふ乙子の朔日とゝふ、和の諺ふ季の子と乙子と称もて、又初の子と太郎子と称もて、故歳の初の月と太郎月とゝふ、歳の末の月と乙子の月とゝふ、故ふ乙子の朔日とゝふ、又此日餅とゝゝふこれと才子の餅とゝふ、江戸の俗ふ豆と川浸餅とゝふ、俗傳ふゝまを食へハ水難ふとこ

大神祭

上の卯 此祭一年ふ両度あり、夏のとの部ふ注を、

御佛名

十九日ふ

被綿

柏梨の勸盃 廿一日迄 て宮中ふ仏名と置く、

公事根源

仁寿殿の御本尊とうつして、御帳の中ふうけて、南の額の間又南北ふ机とゝて、仏像塔形とゝく、佛前ふ香華と備ふ廂ふ地獄変相の御屏風ゝゝ、〇被綿ハ御仏名の時、導師並ふ衆僧ふ被け賜ふ綿ゝゝ、

江次第

柏梨の勸盃 江次第 裏書云 柏梨の勸盃ハむゝ府の中將和氣の某摂津国柏

梨の荘と以て左近府ふ寄せ、その地利と以て官入以下酒醪の料ふ宛ル、是も御仏名の時のこと、

おふ

やらひ 追儺とらかつ の部ニ見ル、

蒼朮買 この部五条天神参の條ふ出ル、

大原雑喉寝 山城国愛宕郡於波羅ハ矢脊の北ふあり、名勝志 大原村雑喉寝ハ、蛇井手村の大淵ニふ池ふ蛇ふ、そ、ろ〳〵里ふ出て人とらんとす、そのあく時ハ昼夜とゝ〳〵まで男女所ふあつまり卧してうてゝ、こゑと大原の雑喉寝とゝ、この夜男女うらひとゝ、それいこの起ること、大原物語ニふ古き草子ふえるせり、その後産沙神の拜殿ふ節分の夜男女恭笠して通夜もること、江文明神の社ニ、大原の西南、山下平林の中ふあり、祭る神倉稲竜命

岡見 逆さ蓑 温古実録

大晦日の夜高き岡ふ昇て、蓑と倒ふ著て、逆ふ我家と、ゝ、ハ、明年あくべき吉凶の事ふ也ニ、堀川百首こ、ごまのあむらあさふとゝ、ゝ、ゝ、木もるゝ、ゝ、ゝ、年をとゝ、ゝ、ゝ、俊頼○ゝ、ゝ、ゝ、ハ明年の吉相とゝ、ゝ、

王子ノ狐火 江戸近郷王子村稲荷の社辺ふ柴束榎ニ、ゝ、ふ、榎ふ、毎年十二月晦日の夜半、この木の下ふて群狐火とゝもすあり、その狐火と以て農民明年の豊凶とす、今夜社内ふ恭篭多し、続虚栗 年一夜王子の狐ふ、ゝ、素堂

大歳 五雑俎及ひ代醉篇ふ元日と小歳と名ケ、これふ對して大歳とゝ、

大晦日 紀事 此日良賤つぐみ鳥と焼て食ふ、ゝ、ゝ、ハ身と継の意ふ取て、ゝ、ゝ、と祝ふ長間と称ス、是長久の意ふ取、質と取の家ゝ鳥と食ふ、ゝ、ゝ、ろハ金銀他人ふ借て其利をゝ、ゝ、と欲ス、

綿入、綿打、攪車、綿摘 延綿 肱綿 東綿 唐綿

其実と拔去るを繰ゝ、ゝ弓弦ふ、ゝけてこまと打を綿打ゝ、ゝふ紡車と以て絲ゝ、ゝると紡ゝ、ゝふその外肱綿、莚綿、東綿ホハ作る所の状と以てこれをいふ、唐綿ハ古終俗云木綿ゝ、貞享式 古抄ふ綿の夏

兼三冬物 **綿**

ハ分明あらぬ、或ハ真綿も木綿もまぜく冬ありと
いふまでなるハ附合の害あり、綿ハ打とり雜ぬて、
綿入ハ綿抜の對ふまでハ入字と添てハ冬と定むべし、
綿打と秋といふまでハ綿とバ摘とらひ棉とハ打とらふ、打
ハ木棉ハ打て夾ふこと冬と定むべし、京都の
新綿 掃取の外ハ秋ふ有べし、 **綿帽子** 婦人專
被と用て其面を蔽ふ及ぶる輩、夏ハ羅の帽
子と用ひ冬ハ綿の帽子と用ふ唯青樓妓婦の輩ハ
こゝ迄と用ひず故ふ京師の人 綿衣 綿と以て常の
面を蔽ハざるものといへ、 衣の如くしたれ
と製し所々ふ絹とくくり老
者寒を禦ぐの服なり、長短ふ從ふ、 **輪炭** 其炭の
薄くこれを切こ狀車の輪 大ふるる
ゆゑ〳〵これを輪炭とふ、

十二月 私大 奥州南部

の人十二月小の月ハ翌朝日
と以て晦日なり故ふ私大云ふ

送 一日 **神の留守、神の旅、神迎** 此月諸神

沙 十月 **神**

出雲國大社ふ集ふ男女の縁を結ひ
いとふ、神送ふ神の留守神迎ふの事あり、 猿蓑 神
迎水口ふ馬の鈴 珍碩 **神集、神在** との部大社神
事の条ふ出ッ **川**

音の時雨 川音とふれふ
聞ふ〳〵ふ。 **寒菊** 大和本草 冬
菊と寒菊と
いへ寒菊ハ京師花ふ〳〵其巣
照ふ紅ふる茶入別て愛ふ。 **寒梅** ふの部冬の
梅の条ふ注ふ

歸花 冬月諸木或ハ草の花ひらくるあり、
こゝと帰花といふ、正花ふ

瓜 冬瓜ふとの
部ふ。 **枯尾花** 貞享式 此名ハ古今ふ
論あり秋とふひ冬
ともいへまで枯の字と
結びて冬と定むべし、 **兼三冬物 かとびら**

雪 たひら雪 養文云夏衣ふうけく薄き雪と如と
ひら雪と云ふ也トエく此説よろし 犬
子集 佐保路ふるこゝひら雪やふらさらし九重と
こひら雪の一重ふ「山姫ハこひら雪とうきさ

玉海集 おのつから帷子雪や花衣 こハ男文字を書
とるハ證とするふ足まり 俳諧歳時記 ちるとぶらち
片葩ふるふ〳〵といふるハいなゞ、猶尋めべし、○さんぢち
雪 鹿文云ちひら雪と略してちるふや○一説ふ藪
蕓の葉ふ似る故の名ふや○青藍云 猿蓑集 雁
鶯の音ふちひら雪降」此句語勢を按ずふ兼文の
いふる如くかさびら雪の略ふて、ちるべし、 **撓** 北越雪譜
ちり薄雪といふるべし、
古訓ふ里俗うぢきとふ云、ジヤカラとふ木の枝ふて作る鼻ハ反して久イ
とふ蔓又ハカツラとふ蔓とも用ふ山漆の肉付の
皮ふて巻ふ、是ハ前ふ面しふる沓の下ふ
ものふり雪ふふとふまぢるふ竪二尺
五六寸より三尺餘横一尺二三寸山竹とふわりて作る
かぢきまぢりの二ツハ冬雪のゆふ〳〵ふる時踏こまる
為ふ用ふきつけぬ人ハ一足もあゆふとしまれる
者ハこれとなき **鐘氷** 寒夜ふ鐘の声のさえふ
て獸を追ふ、 とふ〳〵ていふるべし、 **鐘**

さゆる 霜夜まどふ鐘の音の一
入さえてきこゆるとふ、 **紙衣、紙**
衣賣 雍州府志 紙子、倭俗白く厚き紙つ
ぎ、柿渋をぬり日ふ乾ふて數遍晴
ふる宵露宿まもるときハ色と発ま両手ふ捧ま
和らげ、衣服ふ製ま、是を紙子と称ま、寒気を禦
がもむ、中古洛東清水坂の人是を裕ふ製まこまを
清水紙子とふひ、又素紙子とふ又紀州根来の土人
白紙を以て柿渋を塗らまして製ま、日紙子
とふ是女子の手を經まして成る故ふ持律及び
南都東大寺、二月堂修法の僧徒こまを着る、好事の
者まこれを着る○紙子賣 夕紅 元禄十年刻 仙臺の
浄瑠璃きうん紙子賣」此外紙子賣の句多し 滑稽
雑談 野郎遊女も着まと云、元禄年中ふハ流行せ
ずして **紙衾** ふの部衾 **蕪菁** 和漢三才図会
えさり の条ふ出ず、 九七月のうちめ
種るものふ根菜とかふり〳〵ふれハ芥の屬ひ其根長
くして白し、莖粗く葉大くして厚く潤し、夏の

初め薹と起し黄花をひらく四出芥のごとし能と結ぶと亦芥の如し其子均して円し芥子ふ似て紫赤色云〻

雄の花 牡ハ花さき牝ハこのるとふ秋の部ふ注さ

枯蘆 芦既ふ成長して四五尺より丈ぞうふ至て其葉老衰して纖く莖筒白色を帯びて竹ふ似くりこまを枯芒とふ〻

枯柳 葉尽く黄落せ〻を枯柳とふ〻

枯野 千草の枯まてる野とふ露と結び

かしこ鳥 條目 鷹鳥の異名〻百山と越ても帰る〻こ鳥雲のそらりこを冬〻

狩 鳥獣ふ限らず凡て尋求ると狩と云羽を高但し爰ふ出せるハ專ら鷹狩ことをくとふ

狩場 古事記 獵庭

狩場の雉 注ふ

狩杖 田犬と引不及

べし

の〻杖をつふ犬といまゝひる杖〻鷹鳥三百抄 狩杖ふハ櫻の木を用ふるあり杖の長さハ其人の長さふ切もの〻

鴨鷹 鴨を取くせと 鷹る狩をつふこぞ

鳧 格物論 鳧ハ野鴨〻江海沙上ふ在て沙石を食ふ只蛤を食ひて消化きぞ糞ふ随て出づ○凡鳧ハ雁より後ふ来り春ハ雁より後ふ帰る○あぢむら 夫木 とぢそむる氷をいふふるんあぢむらるる諏訪の入海 西行 鶏鶴のむらぎもるるとふ

鈴鴨 句合 鈴鴨の声ふ〻て月寒し嵐雪○かべ刀鴨と云一種〻又尾長鴨ともふ味美〻赤と補ふ○あいさ小鳧ふ似て同じ〻ぞ背とがる九きこあり魚を食を味ふ〻ぞ○どう長アイサ真鳧ふ大〻首黒し○みとあひさ〻ひろ〻あ〻も鷺鳧緑頭赤頭ふ〻く嶌〻真鳧此外種類多し枝拳ふ違あ〻ぞ○水翁鴨の〻と増山井ふ出せり 急就章 鳧翁顔を灌ふ水藻と得く喜悦ふ注さ鳧公羽ハ頸の上の毛〻云云故ふ水翁とふ尋ぬべし

鴛鴦 鳥の俗称〻ふ

石花 の部ふ〻べし

蘓頌曰今海旁皆ことあり尤多し石ふ附て生ぞ磈磈相連て〻く房の如し呼て蛎房とを晋安の人呼く蠔蒲とす初生止石の如し四面漸く長し一二丈ふ至る者暫叢とを〻て山の如し俗蠔山とふ一房の内

肉一塊あり、大房ハ馬の蹄の如し、小房ハ人の指の面の如し、潮の来る毎ゑ諸房皆開く、小虫入るときハ殼を合し腹ゑ充満す、○時珍曰、牡蛎蛤蜂の屬皆胎生卵生あり、独化生純雄ゑて嶋ゑ故ゑ牡の名を得たり、蛎ハ蠣ハ其粗大なゑ

十一月

○石花の字ハ文選江賦ゑ見えたり、

春日祭

十四日、此祭一年ゑ両度あり春の部注ス、

狩の使

この部五節の条ニ出

賀茂臨時祭

下酉

公支根源 宇多天皇王侍從と申奉ることき、狩ゑくるひくるゑ賀茂大明神出現くまのひて臨時の祭とたゑふべきよ約しゑくことのありて寛平元年十月より、臨時の祭を奉らせゑ給ふ、

神樂

公事根元 大うと神楽のおこりハ天照大神の天の岩戸をさゝてこもりゑひゝ時諸神のいのり申さしとゝるゑふ天鈿女命真辟葛を蔓ゝて日蔭を手繦ゝてゝくひ舞庭火をたきしいのゝくゝじまる事、我朝の風俗神代よりとあるべきや○阿知女

梁塵抄 阿知女作法 本阿知女於於於 赤阿知女於於於 ○一条禪閤御説あちめの作法嵯峨所見あり、但鈿女をあぢめとゝふゑやおとうと相通るゝ天鈿命の岩戸の前ゝ俳優をなゝ侍るを今の世よあぢめの作法ゝゑ、おおおハ笑ふ声あり、日本紀ゑハ、と笑声をゝゝ、ア、オ、又五音通るあり、○東三条の御神樂、兵範記云仁平二年十一月十七日丁未、東三条の御神楽行ハる云云 拾芥抄 東三條の第ハ四條院誕生の所或ゝ重明親王の家云、

神樂歌

千歳、早哥、吉々利々、星、得錢子、木綿作、畫目、弓立、朝倉其駒、竈殿哥、酒殿哥、此ホ

神遊ひ哥

採物哥 大前張 小前張 或説ゑ大嘗会の時近江の坂田郡ゝ老翁の奉ゝて稲と春くゝとの時「あゝらゝき年のゝめふくしことゝ千ゝ年せどう」てたのゝきをつゝあゝらゝき年哥とゝゝふまゝ、此哥古今集ゑゝえゝゝ、あゝらゝき年の始ハ御即位の始しゑかゝてゝそい如此ゝとくたのゝきをつゝとハ楽とつゝゝあるゝ、○舞の哥ゝものゝゆゝゝゝ

き山ふる雪のまゝ時ふくおもるゝ中ふ
葛城山例の枕詞あり○採物哥、榊、幣、杖、篠、弓、
劔、杪、庁折、諸摩葛、以上手ゝ採物ゆゑ採物哥と
いふ○大前張、宮人、木綿志天、難波潟、前張、階香
取、井奈野、服母古、○小前張、蓆枕、闘野、磯芋、篠波
殖槻、總角、大宮、湊田、蕚、以上神楽哥、いづれも本末
あり、皆冬季
とわかふり、

韓神謡

梁塵抄 宮内省ふまの所と
韓神二座と申みやこ○本
みゝまのゆふかたふとうけ、とりけらかしけらときせんや、
かりとき、末ハひらてと手ふりもてゆれらかしのう
らをきせん

髪置、帔初

袴著 紀事 此月吉日
帯解 と撰まれ院中三
才の諸王子御髪上御色直し、五才の宮方御深曽義
著袴、九歳の御方御紐直し等、所謂地下の髪置袴
著帯解是ゝ○帔初ハ五歳或ハ七歳の女子ふ、初めて
帔衣を蒙らしむるとふあり、滑稽雑談 九綿帽子あり
尺ふると児ふふりゝ是と白髪綿と称して其寿の
らんことを祝するものゝ、その綿の置ゝる半を金箔

を以て彩ゝる太き元結ふてゆゝと童頭髪ゝ云
又藪柑子とゝふ赤き実とゝその髪ふ結ゆゝあり、未
廣扇と児ふ持しめ吉日とえらし

掛鳥

との部御祭
の条ふ出ず
産沙神の社へ詣づるあり云云

歌舞妓足揃、顔見

連見 假婦伎の名ハ
文献通考ゝ
ゝえゝゝ、今の俗哥舞妓ふ作ゝ、十一月朔日京江戸
大坂芝居顔見ゝこの顔見とゝふゝゝハ、三代目中村勘
三郎工夫とゝ以てゝとゝとゝゝじむとゝゝ又大坂ゝ夜芝
居とゝとゝゝハ宝永のゝゝ、嵐三右工門とゝふ歳子小夜
嵐とゝふ狂言、其ゝ繁昌しゝて見物夜中より群集し
後ふハ初夜ゝゝ来りゝるゆゝふゝこれを嘉例しゝ顔
見ふハ夜芝居興行ゝゝゝん凡俳優一年の座組この狂
言ふ定む故ふ顔見面見の称わり又晦日の夜茶店の
軒ふ種々の造り物と出ゝゝこれと顔見の飾物とゝふ或
ハ臭負の花生ゝゝ、酒樽、醤油或ハ炭の類、何くれとゝく
山の如く積あげ、大ふ札と出し、進上某丈の文字を書
これと積物とゝくゝ注ゝゝと見物せんとて、諸人群集ゝる

こと更ふいふべうもの、凡俳優家十一月朔日と以て相祝ふ〳〵元日のごとし、よりて芝居の正月と云、

杜父魚

山海名産圖会 越前の霰魚ハ此国の外ふちの〳〵ときく、杜父魚ふ充るい誤ることゞ霰のふる時ハ腹と上みて流るゝといふ、一名とかゝつゝとゝく、声あり、是杜父魚の種類なり、杜父といひて誤ることあらざるゝ、

続猿蓑 かく

ゝつゝや腹をあら へてゝる霰 拙候

寒苦鳥

五雑組 五臺山ふ寒苦鳥ありて四足肉の翅あり、夏月毛羽五色其鳴こと鳳凰我〻もろ〳〵ふ〳〵ごとし、冬ふ至毛落て鳥の雛のごとし、寒と忍て號く得過且過とゝふ、其糞鐵の如く狀ち疑脂のごゝ、恒ふ一處ふ集る、醫家こゝと五霊脂とゝふ是こ、

佛経 印度大雪山ふ鳥あり、此鳥夜寒と苦て鳴声寒苦身と責む、夜明けバ巣と作らん、明て いまと今日死ることを考へず、亦明日とも〳〵何ふ故ふ巣と造て無常身と安穏ふせざる、

玉巣 あるれく雪の深山ふあ〳〵鳥のあるふ おどろく人のふきうふ後京極

十二月

被綿、栢

梨勧盃 との部御仏名の条注ス、

鵲始巣 雞乳 礼月令 鵲始巣

此記、丑月之候、丑月十二月也、雞乳同上、大寒之候十二月中也、〇一説云、十二月始めて巣くふ、戸開ふ太歳ふ背き、太乙ふ向ふ、来歳凡多きと ゝ〳〵巣ふ〳〵ぞ巣下ふ故ふ曰鵲来と知り、猩々徃と知る、〇鵲の形狀ハ、

乾鮭 乾〻製〻さる鮭〻秋の部鵲の橋の条注ス

〇乾鮭も空也の世も寒の

かゝ拂

内芭蕉 滑稽雑談 ほとゝの人年の終ふ僧尼山伏の輩ふ金銀米銭を と供養〻施行もろと、俗ふかゝ拂へとゝふ具ふハ如年拂ふべ〻、今年無支ふ送ゝと来年と待えゝ又年と加ふべき祈祷ふ其身

竈公祀 五雑組 俗皆十二月二十四日竈と の年とゝらゝふ〻〻、祀る、謂ゝ竈神この夜天ふ上ゝて一家の善悪と以て天ふ奏ス、是日婦人女子斧と持ス云〻、俗猶これと竈公とゝふ、萬畢術ふ云竈神晦日天ふ帰ゝて人の罪過と白す、

酉陽雑俎 竈神六女あり、常ふ月の晦と以て天

ふ上ア人の罪を白も大ふるものハ紀と奪ひ小ふるものハ筆と奪ふ○我俗十二月下旬修驗と招きて竈神と祭ふ又ハ竈祓又竈注連とも〳〵五月九月又ハ〳〵

寒の入 大寒小寒此両日

小豆餅を食ひ北越の俗是と

寒念佛 滑稽雜談 傳へ聞くふ往古よハふくゝ〳〵とふり京田舍ハて僧俗ハ限らず寒三十日曉天ハ及びて山野ハ出高声ハ念仏と唱ふ〳〵ことと寒念仏とふ〳〵近年室永ハ及びて京の在俗男女老若と隔てなく五三味線を〳〵もて行粧喧〳〵

寒

寒固と〳〵

垢離 修驗の徒寒中道路並橋の上ハ立て水を浴び銭をとふ〳〵り是と寒垢離とふ〳〵是寒中の水

寒く聲 哥曲ハ遊ぶ者寒中朝暮大ア行ふ〳〵り

寒造の酒 寒曝時珍曰酒ハ臘月醸〳〵造る者數十年を經て壊ることなく老酒とふ〳〵

紀事 背寒中新ハ井の水を汲ふ桶或ハ壺ハ盛てこと〳〵と收め

蓄ふ〳〵ことと寒水とふ〳〵五穀及び諸菓生姜ホの物と漬て後陽乾ふ〳〵もこと〳〵と寒ざら〳〵ふ〳〵

寒の雨 寒中の雨とふ〳〵 鳥さく〳〵 羽の田づら寒の雨 芭蕉

寒月 寒月

居合とふる

寒の内 のら猫のこゑ〳〵もつの

葭ぐゝひ荷ハ

門 ふや寒の内 浪化

松營 飭松賣 紀事 山人稚松翠竹と賣松ハ飭竹賣 子の日の松と称し竹ハ飭竹と云

竹の子 ゑの部孟宗竹の条ハ注を、

寒 掛乞 貞享式 掛乞と冬ことさぐること

ことハ今の例ハ〳〵ハ秋の〳〵ふとつれぬ〳〵〳〵、

よ

兼冬物 夜興

引 冬の夜山中獣と獵ふ犬と引ゆ〳〵ふ獵師のことふヨコ引とふ〳〵獵の内ふの狸狩を

十月 吉田祭 此祭一年両度ふ〳〵り夏のよの部ハ注を、

十月

吉田大祓 節分 紀事 節分の夜ハ部家吉田の齋場の内陣ハて清祓と修ふ神

人一人これを従ふ。その式、正月十九日の夜の行法と同じ。節分の朝、部家宗源殿小於て、神道護摩と修す。疫神齋札三千枚を出、諸人求めて門戸に貼す。

十月 爐

舍 ろの部 炉閑 **達磨忌** 五日 紀事 梁の大道二年十月五日入寂。大年 釈書 達磨者南印度の条に出ず。

小の禅刹悉くこれを修す。元亨 香至王第三の子。蕭梁普光元年庚子、支那に来り、武帝のくめふ茅一義と説、帝契ごとに乃ち江を渡り、魏に入、嵩山の少林寺に居、九白九年を経て天竺に帰る。

兼

三冬物

玉の塵 玉の屑同じ。雪をいふ。**たびら雪** 部 帷子雪の条に併せ注す。**垂氷** つの部つらゝの条に併せ注す。**炭團** 注不及。**湯婆** 和漢三才圖会 大年保唐音欽、按に湯婆銅器以て作る。大さ枕の如くして小き口あり。湯を盛て褥の傍に置て腰脚を煖む。因て婆の名を得たり。竹夫人と此と、寒暑懸隔の重器なり。○黄山谷湯婆詩云、小姫

暖足 臥具 **足袋** 華 和漢三才圖会 単皮、足袋俗踏皮俗字 半靴、和名多鼻、今野人鹿の皮を以て半靴とす。名づけて多鼻といふ。単皮の二字を用ひず。凡冬は皮を用ひ、夏は綿を用ひ、春秋苗を下し、秋苗を下す。冬、堀春の末薹を抽んでゝ花をひらく。紫碧花、夏の初角を結ぶ。貞享式 大根引 此詞は冬の当用なり。大根と畧して音語よむべし。京家のなまり引なる故なり。

刀鳥 の部鳥の条に注す。**鷹** 時珍曰、鷹鷂、鷹擊を以ての故ふれを鷹といふ。其頂の毛角あり。故に角鷹といふ。其性猛爽。故に鵰鳩といふ。

大和本草 鷹の類三種あり。鵰の類、鷹の類、鷂の類。和漢三才圖会 鷹の尾十二枚長サ五六寸。ふくの合て赤ハ円く、黒白の重紋あり。天寒ときハ尾を畳むと一枚のごとくなる。尾損傷に遇ときハ漆樹の汁を取て他の鷹の尾と接。尾の下に三品の毛あり。星未毛ととゝ乱糸、挾衣下の尾と石斑ととゝ尾の端の白き者と拘華ととゝ背の毛と母衣毛ととゝ其股に出る白

毛と茅花といふ、背の脇の毛と歯黒付といふ、肘の内の毛を水掻毛といふ、脚は韋緝と著る処を無毛脛といふ、共は皆俗称なり、○雀鷂、兄鷂、鷂鶴、鷂、隼、角鷲、サシバ等の種類あり、各頭字の部に分ち注す、

鷹狩、鷹匠

追鳥狩　鳥叫　偷起鳥　そこ草　落草　ちから草　鳥立墓　列卒

縄　狩杖　狩場　呼声

○本朝ふく鷹を肘よりそる八百済の酒の公より始まり、仁徳帝の四十三年秋九月、阿弭古異鳥を献ず、百済の酒公とこれを養ふ、酒公韋緝を以て其足につけ、小鈴を以て其尾に著て腕の上に居ゑまして献ず、始て鷹飼部を定む、又酒公鷹を居て帝の狩に奉従て以て雉を鷙其後兵部省に鷹司あり、後冷泉院帝の時、出羽の國司源齊頼これを飼ひて放つ、最も神妙を得たりとぞ、○追鳥狩は雉子狩に列卒を以て雄子を追出してとる、又田野に群居る諸鳥の追鳥狩もあるべし、○鳥叫　萩枝折　鳥さけひとは、それくる鷹をよぶとく云ふ、又狩人の声を立て鳥を追ふるをいふとぞ、○偷起鳥は、めまそこ、そこあり、鷹狩おそれて草にかくれる鳥のひそかにふくところ、又めまそこ、そこ鳥、鷹をふあひて草のつけをとぶ、○教草　落草　藻塩草　そこへ草とは鳥ある処をそこふるあり、さて鷹の鳥を追落しこれを落草といふ、その落草の上に羽を引て知らせるとこそ、○力草　藻塩草　鳥と草に追ひおとして鳥をとらしめそこ鳥の落草と取て草をとるといふ、是力草なるべし、ちから草　こは鷹、鳥をとらへ定むる草をつくり飛とぬく、○鳥立墓　ふとは鳥の立さもとひて狩人の行をとらへ、○列卒縄　藻塩草　鹿狩　小縄を引て鹿を追出すをとらへ、鷹狩おと追鳥狩おと列卒入事勿論なり、その外おもあるべし、鷹匠の士卒のかくつくりと列卒をとらへ、

鷹の鈴

鷹書　鷹の鈴著ることは

○呼声は鷹をとらへ声なり、鈴板とそちひさき金をて板と造り、尾黐おつけくそのうへに鈴のあくうて鳴なり、物ぶくて鈴師並に鈴の付やう

鷹朔

梨布　鷹三百首抄

梨は木を用とする、春は梅、夏は擬、秋は檜、冬は松、外

格ハ野山ヨリ結ヒ来ル、一切立木の枝のあるヲ、外樂ハ切ぬものゝ枝ヲ羽をつくるものゝ又樂布ハ樂毒と云ふ毒布ハ似タリ、

鷹鞲 和名抄 鞲 和名太加太須岐 臂衣也 鷹三百首抄 公方家の紋ヲ染る、

鷹揺 同上 鷹ヲ居ヘタリ夜居の時鷹ヲ居ヘタリ手きとらう、

鷹の藥 柳の露 切壷の水 夜取水 恩沢水 篠吹 鷹鷂経験方 柳の木の上ニ虫あり、状ち錦の帽子 鳥の卵の如くして斑文あり、其虫と取て水ニ搗て食ヲ和し、これを飼ふ神切あり、〇切壷の水、柳の露 条基房卿鷹飼連哥抄 切づいの水ハ鷹の藥あり、桑の枝の切口ニ水あり、柳の露、これも藥の水なり、〇一説ニ夜取水恩沢水、意慕水ヲ云ふ皆ヲ経水のことなり、〇篠吹 鷹三百首抄 篠吹と云ハ青竹をめつめて切口より出る意氣ヲ云ふ、鷹の羽のぬけかゝるを直ちらんと〇錦の帽子 同上 錦の帽子とハいふも色よき紅葉と取てそまゝ鷹の

風ヒ洗ふ、

鷹の經緒さそと 鷹書 経緒さそとハ付ることなり、経緒ハ鵜とより小き鷹ヲよあり、大鷹ヲ付ることを云ふ、縄ヲ云ふ、四十尋の縄あり、凡経緒ハ二十ひろなり、

餌袋 鷹三百首抄 水餌と云ハ洗ひ餌のことなり、〇餌と云ハ洗ひ餌のことなり、さ〳〵餌と云ハ架ヲ餌をそこ付て飼ふことなり、

鷹犬 打餌 犬ヲ三品あり、田犬と云ふ田犬則鷹犬なり、〇打餌 鷹三百首抄 打餌と云ハ犬の食物なり、犬ヲ野山ヨリ飯ヲ糠ニまぜて餅の如くして、鳥と立てる時餌ヲなり、

竹尾 鷹三百首抄 深き江の底ヲ沈めて魚と取る具なり、その形ち丸き小篭なり、口ひらくなり、沈むときハ口開き、引上る時ハ口閉、是ヲ餌と入て、湖底ヲ沈めなきて雑魚蝦と取、冬月多し、湖西堅田の漁船一艘ヲ竹尾数百で積、沖ヲ漕連出てこれと沈む、漁人の産ニ芋環ヲ釜字と用ふ非ニ釜ハ少ヘしといへの之て流川ヲ釜ヲ伏て魚と取る具なり、つゞハ大ヲ違之、

短日

月令廣義 漏刻 盈四十一刻夜五十九刻 杜詩 寒日經蒼短、

杏魚 東医宝鑑 杏魚俗名大口魚、

大和本草 大口魚ハ北土の海ニ多し、南海ニハ生せず、西州ニハ北海ニも生ぜず、朝鮮ニ甚多し、寒国ニ生ず、冬春多く捕る 和漢三才畍会 夏月全くあし、故ニ俗鱈字ヲ作る、味鮮魚ハ佳ならず、臘として甚佳し、或ハ酢ニ浸し鯛煮て食ふべし、或ハ醋ニ浸し食ふもまた佳なり、○雲鯛、杏魚の鯛ニ雲鯛、菊鯛と云ふ形色を以て名づく、

雞卵酒 寒気を禦ぐしるふ 飲之、依て季とす、

十一月

當麻祭 十四日 ○一年ニ両度あり、夏のたの部ニ見ゆ、

中寅、○吉田八幡の祭ニ 公事根源 この祭ハ人の魂魄の離遊するを招きて身中ニ鎮るの寄特あり、宇摩志麻命ヨリ起るとぞ、

大師講 智恵の粥 智者大師の忌日ニ、廿一日ヨリ廿四日ニ至る、諸山大師講と修す、比叡、東叡、日光の三山、廿一日ヨリ廿三日ニ至るまで昼夜法問あり、是を論議と云ふ、一山一院づゝ会場と勤じ、これを天台会と云ふ、俗もまた大師講と修し、各赤小豆粥を食ふ、枯柴と折て箸とす、是を智恵の粥と云ふ、

仏祖通載

天台智者禅師、開皇十七年十一月廿四日ニ寂ス、大師諱ハ智顗、字ハ德安、潁川の人 畧

澤庵漬製 九十一月中旬ヨリ大根の澤菴漬と製す、

○青藍云、沢庵和尚はじめてこれを製を故ニ名くと云ふ、愚按ずるニ沢庵和尚の墓所武江品川東海寺ニあり、魚鱗塔と云ふ、大根漬の壁ニ丸き石を置さるさまし、沢庵和尚の墓所の形ニよく似て、故ニ俗沢庵漬と云ふ歟、

十二月

大德寺開山忌 廿二日 大德寺ハ山城国葛野郡紫野ニあり、今日開山大燈国師の忌日ニ、

和漢禅刹次第 大燈国師行状云、師諱ハ妙超、宗峯ハ其号なり、播州揖西縣ニ生ず、紀氏の子、父母観音大士ニ祷て誕生ス、十一歳の時同国書写山戒信律師と師ス、成長して不立文字の宗風を慕ふ、中畧建

武二年十二月廿二日逝去

宝船敷

紀事 節分の夜画船に白紙に貼け、諸臣に賜へ、地下良賤も画船と衾の底に布て寝る、今夜吉夢あるべきに、来歳福と得べし、悪夢と見るときは翌朝これを流水に付て悪夢を流すべし、和俗この船の内に種々の珍宝を画くを宝船と称す、近世これを梓に鋟て児童市中に売る

居家必用 船に乗日月入と夢る時は吉、船を渡ると夢るときは大富貴を主る、○今の俗正月二日の夜に宝船を布は元禄年間より遥に後のものなり、

鯛味噌

鯛味噌は肉味噌と同じく、酒とを以て煮熟して食べ、

十月

袖の時雨

涙の雨もぐしつに同じく、

蕎麥

蕎麥は新蕎麥と秋と、

苅

苅は苅と冬と、

早梅

范至能梅譜云冬至前已開故得早名要非風土之正、

兼三冬物

雪車

北越雪譜 そもそも此輜とは物、雪國に才一の用具なり、人力を助ること船と車に同じ、且作ること易き、形ち輪なき地車の如し、大小定りなく、我国の物よりもと物を用ふ、我国の雪冬は凍らざるゆゑ、冬は輜をつくへば雪に落入て擿事なし、輜は春の雪鉄石のごとく凍てゝ、正二三月の間は用ふべきものなり、其時よりして里俗輜道はなはだしとなす、俳諸の季寄に雪車を冬にもとるは誤なり、今これをもて雪中の物あれば、春の季にも必気あり、古哥に多く冬によめり、実に冬にもとも冬にして可なり、山中樵るところの薪を雪車に積て引帰る、或は山に曲りあるは件の如く縛して、薪の輜に乗片足を遊ばしてこれを指て、船と走らせるごとし、此術学ばずして自然に得るところ、輜を引ふくれらぬ奇と謂ふべし、雪車奇と謂ふ則樵哥あり、漸くその家にちかくときその妻子その奇を聞て夫の帰りを知て出迎へたるけしき家に至らむ、○青藍云俳諸歳時記に近来雪車の句作あるをもて多くは雪車に乗とは雪車は薪を積のみ人の乗あるべきものにあらざるべしと云へるもこれ

堀川後百首 そのとゆきあるふけらゝなわらち山越のさゝび人雪車ふ乗まで 曠野集 夜とゐて雪舟ふ乗るとゆゝるふ此外先吟あまこゝあれば、蕎麦湯たとへ實事よりもゆふとも〻〻からび、

本朝食鑑 蕎麦を用て熱湯ふ撒し、拌匀徐きこれと飲めば寒を禦とゆふ然れども蕎性寒〻寒を禦ぐの理あり、惟熱湯身を煖むる故なるべし、

十一月 園韓両神祭

中の丑○一年ふ両度あり、春のその部をるべし、

十月 大莖

の花 俗よつぶきとゆふ、本草綱目 欵冬花の條下云一名橐吾 大和本草 莖葉欵冬ふ似さり、名山吹とゆふ世俗ふ庭中ふ植て玩ぶ秋黄花をひらく冬ハ其実房をなして数の顆あり、フキよりも葉厚くして光あり冬も莖葉ありて枯ずその莖を食するふ味フキの如し皮を去てフキの如くをゝしこれと欵冬ゝとの人あり誤こ今按るふ急就章ふ橐吾欵冬よ似て腹ふ糸あり陸地ふ生ス花黄色とゆふ、

是つゝしまるべし、

兼三冬物つらゝ

垂氷 友人介我云つらゝハつゝ、のつゞまりつらゝハ氷のまゞる形容あり、尾張の家産ふもとゝえて氷とる形容とゆふ 源氏末摘花 朝日ゝまゝ軒のゝゝゝハとけあゞらなどゝつらゝのむまゞるゝらし此外證哥多し、たるひい落る雫のゝゝ氷りるとゆふ俗つらゝといふもの是なり、

新古今 立めゝ〻山のゝづくも音たえて槙の下葉ともなるひゝ〻ふゝ此三のゝもまて舟ふ〻〻さゝをつゝゝゝるひのけぶりもゝ、古人も旬作せゝハ、俗談平話ふまゝ〻故ふ強て改むつきふあらゝ

○銀竹 垂氷の異名とゝ〻ゝきの部をゝべし、

綱貫

滑稽雑談 當世早賤者のまく綱めきゝ称するものハ、往古ゝちゝめの遺風を轉じゝ〻牛の皮を以てこれと造て、履底ふ鐵を以て刺せ物、云ゝ今雪沓とゆふもの是なり、

炭俵 頭巾 袖頭巾 御高祖付 綱貫のいぶの痕あ故、雪の上

頭巾 きゝ〻頭巾 きゝ〻頭巾 きゝ〻頭巾、きゝ〻頭巾、頭巾、名一物ふ属骨

董集ふさえさう、今つゝ芝詆頭巾ふ似さう、五元集目ぢうときまゝづきんのうき世うれ、其角 用捨箱 紬頭巾、一名御高祖頭巾といふ物、ふるきこ草紙こを見こぞ、宝暦八年の写本愚子痴拾遺物語ふ、一両年以前より さうきづきんあるふ、紬頭巾といふ其原ハ順光といふ坊主、品川へ通ふ高祖日蓮上人のうゞ物より思ひつきこ〜こ、〇九頭巾ハ今いゝ大黒頭巾のこゞひあるゞ〜、そこ頭巾未考、

露氷 氷るとこひ

つえたき 苧環ふ凍

て冬、

ふり人の字と用ふ、

雀鷂 和名もゞろ 鷹或ハつゝ

悦哉雀鷂ハ鷂の

屬雀鷂の雄ふり、

月の氷 御傘 冬こちりたゞさ やこのふるとちうゝ水辺

ふあゞゞ但し氷ふ移りこる月の句体あゝバ水辺ふるべし、新撰六帖 いいもゞゞゞとりの ちらしの寒ぬれど氷

ふさ空ふ氷 つきさゆる

こ月影 家

月冴 さゆるらしい いて冬ふ

十二月 **月次**

祭 十二日〇一年ふ両度ふり 夏のつの部ふるゞし、

追儺 鬼やらひ 周礼 方相氏

ハ黄金の四目ふり、玄衣朱裳戈を執り楯を揚て百隷と帥ゐる時ふ儺ひも、五雜俎 儺ハ以て疫を駆く古人最こゝもと重んぜ漢ふり唐ふ至りて宮禁中こふるを行ふ護童假子千餘人ふ至る王建が詩ふ云ふ金吾除夜進雄名畫袴朱衣四隊行ぐれく今即民間この戯ふり、但恵鍾馗と燃爆竹とのゝ、公事根源 大舎人寮鬼と勤め陰陽師祭文とりて南殿の辺ふ着てこゝと讀む、上卿以下こゝを追ふ殿上人御殿の方ふ立、桃の弓蘆の矢ふてこゝを射る、儺ハ 江次第 裏書 儺と行ふハ晦日ふ前ぐつゝ二日、公事根元 晦日 世諺問答 瘞裏抄 ふ節分こゝあり、按ぐるふ中華ふ金五日除夜進雄名とあれバ節分ハ後のこゝも、

兼三冬物 **葱** 根ふう 文字 大和本草 大葱ハ五月分栽う冬春さうんあり肥地ふふ実こ植ハ八月九月苗こバ白根長大云 故ふ根ぶうと称ス又日和名抄ふ、和名紀と云、紀の一字と名くる故ふ、一名一文字とのふ、

子祭、子燈心 大黒天の祭こ、

紀事 凡商賈此月子首子の時ふ豆を祭る蓋賣買の間その利を取と鼠の子の蕃息ふ比せんと欲するし、子ふ供する所の膳食品毎ふ大豆と加ふ又二股大根と供を大豆ハ鼠の好む食ゝ両股大根ハ俗福来と称を、○子燈心 和漢三才畠会 毎十一月子の日ゑとと貯ふひまごそのゑをもくもを、

十月

年貢納

滑稽雑談 秋収とてむ〜ハ秋月待ふ〜當世多くい冬月迄ふ皆済まあ〜惣〜〜一年中貢ぐもの数多ゑれで句体ふ〜て雑ふあ〜ゞし、○青藍云年貢納とつるゝ増山の井及び苧環ふこれと載せもゝ〜とい〜ども 炭俵集ふ今の間ふ雪のつゝきとゝ〜てゝるゝとつる前句ふ年貢もんごとゝ〜ゝ芭蕉又千鳥ふくゝ〜ふ寒〜ふ〜ゝる前句ふ未進の高のもてゑ算用芭蕉云〜ゝ〜ゝも冬季ふ〜れ〜ゝ〜れば冬季〜〜て子細あるもの

な

十月涙の時雨

涙の雨ふ〜ゝ〜ゝふ〜れ〜

名の草枯る

萩 荻 葛

兼三冬物生

名の草枯るゝ〜と凡ふ〜ふ〜ふ〜ゝ句作ふ〜ゝ〜ゝ

海鼠

海鼠 金海鼠 和漢三才畠会 按ずるふ海鼠中華の海中ふ無之遼東日本の熱海鼠と見て未生ゑるものと見ず故諸書ふ載せる所ふ熱海鼠ふ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

酩とも味ふ、

鍋焼 貝焼 皆其食物の調味を温めらり、冬寒氣を防ん

このもことの人

納豆汁 本朝食鑑 叡名納の字未詳 或いハ僧家の庖厨と納所と

ふ是と用ふ

呉、納豆ハ近代僧家多く造る故ふ此豆僧家の納所より出ると以て名づくる歟、

十月中山祭 上卯 ○一年ふ両度あり、夏のまの部ふ注す、

十月内侍所御神楽 公事根元 天子内侍所ふ行幸て御拝あり、刀自祝詞あどいふことあり内侍所の前ふ主殿寮幔を引く官人庭火をたき本末の座を二行ふ設く云、紀事 官人内侍所ふいたりて鈴を上る是神楽を奏もる義、御供米とのふ「ふるを」と御久米とふ人鈴の音と聴て仮りふ鶏鳴とあり〜て帰る「ふ」と年をとるとつふこのごろ〜そなたき八来年何方ふ向ひても障礙ふ〜とのふ、

あよ〜の頭さん 世の部節分の茶ふ出ッ、

長崎の柱餅 肥前国長崎ふそなしのれの餅搗の日ふ終の一日の餅と家の柱へまゝと付おき、正月十五日左養長の火ふてこもと炙て食ふあり〜こもと柱餅とつ〜このこと事西鶴う世間胸算用

らむ

十月村時雨 とつ〜ふ〜〜〜〜れ

麥蒔 漢土ふてハ秋種と下もと本邦十月種と下し四月熟ふ、

兼三冬物六の花 雪の事ふ 韓氏外傳 九草木の花多くハ五出、雪花独六出、

朱子語録 地六ハ水の成数、雪ハ水結びて花とあ〜故ふ六出、

延喜式 神名帳云筑前国宗像郡宗像の神社三座神社啓蒙 胸肩社云〇一説ふ宗像郡田島村ふあり、蓋筑前大和、山城以上三所ふ宗像の社あり三神共ふ玄盞鳥尊の女ふ田心姫湍織津姫市杵姫とつ〜、

十月宗像祭 上卯

咲の梅 室の内或ハ土蔵の内ふ炉火と儲けこもと暖むる時ハ其火氣ふ感〜て忽ち開くこれと室咲の梅とつふ、

十月胸搞 俳諧歳時記 むつ〜ふ食年の暮ふ人家の門ふとち

十一月 鶯の子

曹とあらハし、手と以て脇とゝゝき、節季さむらゝく
といひて錢とも乞ひ、ふりこれと胸搞とらハ三十六番職
人寄合ふたの番殘とり今
節季いとい者是あり云

さゝ鳴 貞享式 此名ハ古抄より啼の字と結
びて冬とあせれども鶯の子啼とハ名
目も長々ゑハ啼の字あくとも冬とさぐむ〳〵、彼を
冬至のこうより鳴習ふ也もんふ其子ふ冬の用あゑハ
ありまして鶯のさゝ啼といハ子の字ゆも及ぶ〻き
く〇青藍云俳諧歳時記ふ冬日鶯藪中ふ鳴これ
とさゝ鳴とハ云、此說おざゆふらぶ愚按ぶるう
さゝハふ少しの義鶯の子の鳴ふらひとのふゆ〻ゑ〻し、

兼三冬物

打餌 たの部鷹犬 浮寢鳥 の条ふ出ッ、

みの部水鳥 薄氷 詩云戰々兢々如履薄氷

後拾遺 埋火のわくりハ春のこうちゝゝゝ歌
くる雪と花とそゝゝゑ、素意法師 うるゑん

ゝく魚ゝ 鰡の屬ゝり、鮠ハ俗字ゝ正字未詳此魚目
大ゝて潤ふゝて名ゝを河州の海濱ふ多ゝゝゝ鰲
ゝて京師の市ふひさゝくその多ゝく来るゝゝを季ゝ
用ハ〇青藍云猿蓑集ふ二番草取もゝゝゝ穂ふ
いでゝゝゝる前句ふ灰打ゝゝゝゝゝ一枚や
いふ附われ句体ゝゝゝて雜ゝゝ

十月

梅宮祭

上ノ卯〇一年ふ両度あり、夏のうの部ふ注、

晦日 ゝくゝゝ 九条東洞院ふあり則宇賀の辻と称ス、

雍州府志 九條烏丸宇賀の辻云、両所とゝふ宇賀祭
の儀ふゝ真言家の書ふ任吉の土俗十一月晦日家事と
兼て專ら倉稲魂と祭る古の遺風ゝゝゝゝゝゝ

宇賀祭

探梅

無言抄 早梅と尋る心ふ馮学士探梅詩
一枕悠々夢覺遲疎籬花影午陰移起来
檻外探春信開到東軒第幾枝〇打寄て花へさ
ぐゝゝ梅椿芭蕉翁此句と出されゝふ各春季の服も
ゝゝゝゝゝ羽甚ゝゝて時物の表と聞て一句の主人公
とゝゝゝゝゝゝ日頃ゝゝゝゝゝゝ

申されるまとハ降こむまくふ

初雪の宿こと府くりとど

十月 温糟粥 臘八

御献

八日 [摺山の井] 九山そも入禁中そも有こと

[行事] 温糟粥 醴 鮭焼栗 菜ラコヽカニキリワカシテ、

キラスエ、 [三水記] 本朝ハ臘八粥を温糟粥と名く

今日造る所とこるふ昆布、串柿、大豆、粉菜と相合し、

こと也と製まし是釈尊成道の日なり、 [傳燈録] 釈迦佛

檀特山ゑ非非想と学び二月八日成道又周の三月ハ夏の十月ハ

[夢梁録] 十二月八日と寺院ゑ臘八とのハ大うどら

刹寺の寺俱ふ五味粥と設く名と臘八粥と云 **波斯寺**

[滑稽雑談] 廿日より乞人の妻が白綿巾を以て頭面

と覆ひ、腰ふ赤き前掛手ふ籃を携へ遍く人家

と歴て米銭と乞ひ、ぶらら波斯寺と称し廿五日ふ至く

止む [ちくせ] 節季ハ諸国ふあり、塗茅とふハ京師

ふのこありて

他所ふあり

の 兼三冬物

十二月 荷前の使 鵜鶴

十二日 荷前の使十二月十二日或

ハ吉日とえらぶ

抄ふ云とり諸國より献る御調の稲

と十陵ハ墓へ奉らせるるふその使く、

く 十月 口切

[紀事] 此月良賤おのく茶会

と催し親戚朋友と饗ふ是と

壺の口切とふハ今月の始より臘月ふ至る九膳食と

会席と称し家の豊儉ふ随て佳有美味と求めこと

と調椀折布ふ至る迄こと新ゑそ中畧九茶壺の蓋

の間ふ糊と以て堅く紙と貼本風濕茶を侵さんこと

念ふ故ふ初冬ふ至て小刀と以て紙と貼し合縫を

截蓋とひらく茶と取これと壺の口切とふ○利休日

壺の口切の節ハ橙黄く橘緑りの時

○口切や汝とよぶハ金の事 其角

兼三冬物

懐爐灰 湯婆 温石の類病身虚弱の人懐と煖る物

蓼蓍、蓼漬

[本朝食鑑] 蓼蓍の葉茎と採く淹麹とし収蔵これ

と蓼漬と号ふ年と經て又佳く江州の製造と近江

漬と号し珍ふ年と經て酸味と生ずるものゑ佳

ふハ賀茂の里人の造ると酸蓼と号しこれと賞美ス

朽葉 一説ふくち葉八色と結びても冬あり朽の字重き故あり

くゝら野 八雲御抄 冬の野とのハ〇冬野の枯くゝれるとのハ百済野と混ぜべうゝむ〇くゝら野のさゝめぐ下ふあく鶉そのもゝくゝふ冬ハ来ふくう道因法師

角鷹 鷹の類ゝこ大ふ悍き者ハ全体の形色雌雄大小皆鷹ふ同じ鷹ようり大ゝこと三倍せり雕ふ似て小ハ大和本草 中上ふハ角鷹とも養て鳥と捕ふ

草枯 草枯ふ手おて〜〜ぬ鳴もあり 利牛

鯨突 和漢三才圖会 鯨音擎 鱷本字 海鰌 勇奥万葉 伊佐奈と訓む 狀ち畧鰌ふ似て肥て四く長く周りと等し、其色蒼黒くして鱗ふ、鼻の上の骨高く起り頂の上頭の前ふ潮と吹穴あり口濶く下唇上唇より長くして、頷の前ふ出て舌もまた廣し、凡鯨六種あり、性喜て鰯と嗜て諸魚ふ敵せず海船若尾鱠ふ遇ときハ必覆す冬ハ北より南ふ行春ハ南より北ふゆく肥州五島平戸辺ハ節分の前後と盛とす紀州熊野浦ハ仲冬と盛〜〜てそれと捕ふ鯨と刺鉾と呼て森

とい〜捷木と以て柄とす〜〜鉾の頭ふ繩と着て船の柱ふつゝぐ其鉾鯨ふ中るときハ柄ぬけて肉ふ入鯨の動作ふまかせて深く肉ふ入て抜ず鉾の柄抜ることも繩を着てある故ふ失わず一船の進退と掌ど人と呼て羽指といへ長き袖短き袗と被て宛も軍船の如し近頃大縄の網と用いて豫めこれと繋ぎ森と擲故ふ百一失

十月

獻履襪 崔浩文儀云近古婦人常ふ冬至の日と以て履襪と舅姑ふ上る長至と践の義く 説文 襪足衣也 和名抄 襪和名之太久久 越谷五山遺稿 我朝の製ハ大指のこれめもし足袋ハ元来襪なり、

空也忌 十三日 暁の鉢扣 空也上人ハ天禄三年九月十一日寂す年七十と元亨釈書ふ云へり、〇空也堂ハ極楽寺と号す四条坊門の南堀川の東ふあり、鉢叩ふ此堂と守る傳ふ云極楽寺ハ元三条掛筥ふあり掛筥道場と称す〜〜空也上人勝光夜々執行念佛と唱へ洛中と巡る北山ふ住しとき毎夜鹿来る上人其声と愛して閑居の友とす一夜来らず心

ふ怪む、明日獵者来りて云、昨夜この處ふ於て鹿を殺せこと、上人大ふ驚き悲〳〵その皮と角とを乞ひ〳〵皮と衆〳〵用と杖頭ふ挿て遺愛の物こそ、獵者も又こゝと悔し愧て、忽ち剃髪して僧となる、今の鉢和ハその裔なり、空也晩年修行のゝち、京を出て東行とし、徒弟ふ謂て曰く、今日寺と出る日と以て予が命日と定めこと、故ふ其日と以て法事と修せこ、この院中十八家ありこの中年老のもの剃髪して僧となり、代々空也の字と法名ふかふこの餘ハ有髪妻帯ありて常ふ茶筌と制作し市中ふ賣る、凡十一月十三日より四十八夜の間、夜々市中洛外の三昧と巡つゝ各鉦をうち佛名と唱念じ、或ハ竹杖として携ふるところの瓢とうち、曰く無常の詞と唱へ、施物あるときハこの瓢ふ受く、瓢と以て鉄鉢と代ふ、故ふ鉢和と称せ、和くところの竹杖ハ貴船檀上の竹と用ふ、上人暫く北山貴船檀上の菴ふ寓居の遺意と、

風俗文選 鉢和辞 去来

云、ものゝ修行ハ瓢尊とあり〳〵鉦打〳〵き、一人三人つれともゝ〳〵ひのけ合ての詞ふ其唱哥ハ空也の作なり、中暑常ハ杖の先ふ茶筌をゝ〳〵、大路小路より出て商ふ、中暑あるひハこゝろゆきとゝもり、或ハ四方ふうらけ、法師ならぬ姿の衣引かけたしどゝもも墨染ふいあるゝ、ゝ蘭黄山鷹の羽打ちゝ〳〵べゝる紋どつけゝ〳〵著くゝるハ、月雪ふ名ハ甚之丞と越人も異じ侍る、中暑横雲の影よりうらびくる声して出来るり、けふ老ぬと足ゝきこゝろのふ友とそふふとあるゝ、おれてひとり今ふ名あるゝぬらんと、翁の長嘯の墓もめぐるゝ鉢〳〵きこゝと聞えあひゝるハこの暁の事ふぞえゝりゝる

吾山遺稿 鉢〳〵きこ瓢とうとして訓ふ和讃「無常〳〵来つゝるゝ誰ゝ此苦とのゝ〳〵ぎゝ花ゆゝありゝるゝ」

十二月

藥食

漬貫 本朝食鑑本邦

殘ふ此外和讃多し、略之、此哥と声をゝ〳〵哀ふ訓ひつれて勸進をゝ〳〵、

鹿と食ゝる者穢忌多〳〵ゝて、此加茂春日の神使の故ゝ故ふ世人鹿の訓と忌ゝ、辛ゝと以て鹿ゝふ鹿肉甘温ゝて毒ゝふ、冬時ふ食ふべゝ、他月宜しゝらぞ故ふ寒中特ふ用之中と補ひ氣と益一切の風虚

と療し血脈を調へ故ふ是と藥食ふ者ハ諸獸も又ごとく食ふ

十月八日

手花 大和本草 蕓薹の形蕓薹の如く又かつこの葉の如くして甚だ大なること盤の如し冬凋落

で葉のもと一ツて岐多し七八よりうる白花を開き黑き實ある毒あり木の高サ五六尺ふ過ず、

兼三冬物 山眠 即遊録 冬山蔭淡

十月山

うして眠るが如し

十月

科祭 上巳日〇一年ふ兩度あり夏の部ふ注す

山神樂 内侍所の神樂ハ伊弉諾尊

山の神祭 神代卷 伊弉諾尊

軻遇突智命を斬て五段とす此各五の山祇と化生ス此山の神あり

山林もちゝる畿内の民ごの月山の神を祭る是火燒

祭ゝ山の神の社の辺の樹上ふ幣帛と

きりうけ神供を備へ燎火をくゝ、

十二月厄

塚建る 節分の夜吉田神祇官ふ詣て行ハる、

その式庭上ふ塚を築くゝ厄塚と云、

正月十九日ふ至て解拂ふ為り、

厄拂、厄落 紀事 四十二歳の男子自ら犢鼻褌

と落す是とふぐりゝ〳〵厄と拂ふの義ふ今

宵乞人綿巾を以て面を覆ひ自疫拂疫落と称し、

終夜街衢を往来す、〇唐土も丐者のゆくゝ

夢華録 此月ふ入ると貧者数

十人群をなし神思ふ裝ひ男婦鑼鼓を以て門ゴ

巡り錢を乞ふ是を打夜胡と名く又駆祟の類、

八月鱣取 和漢三才圖会 八月宇奈呼北国の川沢ふ

多し大抵尺ばかり大なるものハ二三尺背

蒼黑くして光あり腹の色稍淺し其首尖らも口裂

ごとくして円く齒細ふ小く針鋒の如し兩眼の後ふ各

七點あり目の如く星の如く錐の穴の如し目とゝもふ

八數あり故ふ名く〇江海處々ふあり信州諏訪の

海ふ取りのを名産とす上諏訪下諏訪一里ばかり冬月

氷ふ閉て厚さ二三尺ふ及ぶこの時ふ至りて鱣を採る人

先氷の上ふ小家を營む小火を焚て穴を守りその穴ふ

柱を建漁者の休む所とす又細或ハ繩を入へき穴を

篝火とゝもふ燒火と以てさそて延繩と入共餌と以て釣
ゝるとゝもその數多し氷あるとゝ稀と用ハ、

ま 十月 松風の時雨

松風と時雨の音ふ聞ちゝたるゝあり、

兼三夕物 廻炭

凡茶会の炭又花ハ上手下手こゝもと習ふ同志相集りて、上座より下座ふ至る迄交く炭と置花と挿むの業と学ふ是と廻り炭又廻花と云ふ、

十一月 當宗祭 上卯日

松尾祭 同日

一年ふ両度あり夏のまの部ふ注ス、

十二月 豆打 せの部節分の条ふ注ス

け 十月 玄猪 亥の子

亥の子の餅 御覧 天平

初冬其月亥ゝ建ス、亥の日亥の刻ゝ餅を食へゞ病ひなし、錦繡万花谷此餅と食ハ万病と除く政事要畧豕ハ多子なる者あり毎年十二子と生む閏年ふハ十三子と生む故ふ婦人ゝもと羨ゝ此日ふ至ゝ餅と供ゝて神と祈ゝ○ねの子のゝ其始詳ならゝゝども延喜式ふも載らゝれハ古くゝ行ゝるゝゝ〳〵亥の子の餅ハ大豆小豆大角豆胡麻栗柹糖此七種の粉と合せてつくゝる〳〵正親町公通卿の秘説御湯殿記ふよその式委〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵○一説ふ摂州能勢郡木代村ふ門太夫とゝふ者住せゝ其の家代々亥の子の餅と貢もゝその先神功皇后ふ起ゝ〳〵ゝ〳〵此所及び切畑大丸の近里ハ山城八幡の神領ゝ〳〵ゝて今善法寺ゝ〳〵ゝもゝ捧ゝ〳〵ゝ

下元日 水官解日 十五日 言書

故事 正月上元ふハ天官福を賜ふ七月中元ふハ地官罪を赦ス十月下元ふハ水官厄を解ス事文類聚正一 吉要云下元三品厄を解ス水官、主禄、百司人間の善悪を撿察〳〵〳〵天闕ふ詣て進呈ス

十月 冬〳〵ろ

一書ふ冬〳〵ろとハ立冬のゝ〳〵ろ〳〵ゝ

冬牡丹

天和本草 冬牡丹八月より葉出て十月より花さく、臘寒の時も花あり元亨釈書ふハ人功と以て天地造

化の力とぬきてこれと成怪しべし

猿蓑 此寒さ牡丹の花のまゐ稼車来

雪吹 雪凡相交るを雪吹といふ

雪吹倒 北越雪譜 國ふそ八雪吹

と花のちるさまに擬しくる。詩作詠哥あ

衾雪 ふところるさま

まこと吾國ふそ八雪吹ふあ人者八九死一生ニ

玉海集 哥枕そ〳〵よまの八色衾雪 山姫の寐道具ふ

ら〳〵衾雪 このふりてハ根こそ〳〵上のふをまこ雪○氷の

水と蔽ひくるを氷の衣とふふ同〳〵雪の物と

厚く蔽ひ包こくるを衾ふこと〳〵てりまるべし

富士の雪 御今 ふハてのねふふりおける雪ハみな月の

望ふけぬれバその夜ふりそ〳〵とよろる万葉

の哥を引て雑ことも 無言抄 ふハ赤人の田子の浦の哥、

新古今冬の部ふ入そ〳〵て冬ことも句体ともよるべし但し

毛吹草 ものくひもべて〳〵冬季 衾 古き衾 夏衾

ふ入たること多ケれバこそ〳〵ふ入べし

敷衾 小衾 和漢三才高会 衾寝衣 ○古き衾哀情

紙衾 まり 白氏文集 鴛鴦瓦冷霜花重舊

枕舊衾誰與共 ○紙衾ハ紙ふて造ることるふ人貧賤

の者の用ふるテントクジ是ふり猿蓑たゝミ日ハ我手

のあとゞ紙

衾 曽良

蒲團 本草綱目蒲席歌名云薦

皆蒲及び稲藁を以てこれを

為る精粗異あり人龍鬚草を以て席を

今絹布を以てこれを為るものを蒲團と

茶漬

ちくうせと 正字彙 冬小魚を取ふ柴を多く緘けその

内ふ餌を入これを江ふ沈め置ハ江中の魚集り入其下

ふをくひ細を入引上て取あり城州淀伏見の江こ

多くこれをあ人 夫木 ふ〳〵つけしあごろ下ふをむをへ

のんとされき身を

いのふせん

俊頼

河豚魚

河豚汁 腹立鰒 古方

西施乳 選注

豚ハ猪の小き者其性よく嗔る故ふ憤豚の称あり

魚中鰒鮎まこよく嗔る故ふ河豚の称あり 北山経

其腹腴を重じ呼て西施乳ともそ ○陶覧云河豚魚

小こゝのゝどを頰及び大魚敢て啖ものを惟小毒もそ

のくふあ〳〵ものを又よく物と毒も煮るこきハ煤焔中ふ落

る事を忌む肝及び子ふ大毒あり食べ〳〵も

滑誓

雜談 和産ふ腹立類として河豚ふ似て小き魚あり味ひ劣る是を地ふ投又ハ木の枝と以て動かしたるき八魚腹を立て鞠の如くふくるること本草ふ云鯽魚腹脹大円緊ありて泡の如しといへる是ならん難波の浦又堺の浦などふまく侍るこゝ河豚の類ならん冬ハ風季ふ用ふべきなり○俗顰字と用ふ誤顰ハアビと

呂吹大根

骨董集 甲陽軍鑑云熟風呂好うく呂吹申さうく云〻 本朝諸士百家記風呂をゆてあも条三云上手の吹手一両人云〻伊勢人の物語と聞ふ風呂を吹といハ空風呂ふあるとゝ〻垢とかくもの風呂ふいる者の身上ふ息を吹かけて垢どろくまりもろもれハ息を吹かけるる所ふ潤ひ出て垢よく落るもりこゝを風呂吹とのふと云〻さて大根と熱く蒸して煙ゝの立ひどもるを大根の風呂吹とらも息と吹かけて食ふさまよれ風呂吹ふ似るゆゑあるゝん

冬籠

寒風をふせぎて居宅ふ籠ると

いへ

新撰六帖 あれあらしの岩屋のゝゆどりのぐるけふりのゝそゝあるとそ

炭俵 金屏の松の古さよ冬籠

芭蕉○草木の凋ゝ冬枯ゝるとも冬籠とらふ

古今 あるハ冬ごりせる草も早も木も春ふまちまの花ど咲ゝる

貫之 冬構 寒氣を防ぐん料ふ風のゝようゝとろとをきぎ砂よけ風よけて北の方ふ莚ゝど張まゝし、すゝ〻冬向の仕利と構ふるあり、

冬の蠅

続虚栗 ゝくまれてなゝらへる人冬のゝゝ 其角

冬の蜂

猿蓑 今ハ世とものむけ冬の蜂 且墨

冬の梅

寒梅

大和本草 八朔梅八八朔のゝろまりひらく花ふ多くて八重まり西土ゝてゝとと寒紅梅とふ冬至ふ至て多くひらく梅の魁まり畿内の寒紅梅八西土ゝて浅香山と

いふ九月まり開く八重まり但九月ふ開くハ狂花まりべし臘月ふ開くと正時とも故ふ寒紅梅とのふ

冬木の櫻

つくゝせと 帰花ふさゝ冬枯ふ小樹まり花葉彼岸櫻ふ似てその枝の櫻まり垂むゝ冬月花をひらく盆ふうるゝく机の傍ふ賞もゝ又夏木立ハ茂てゝるをいひ八重櫻まり稀ゝ冬木立ハ葉の脱落ゝる

さまの事とも

冬の月 源氏朝顔の巻 冬の夜のさゆる月ふ雪のひかりあひまさる空こそあはれ

う色まさるものゝ身のうへにて、此世の外のことまでおもひやるもあはれ

さもいとかなしうもあるかなさもあるものゝ残らぬどころもなきまでに

きこえ〳〵ふいひあきなん人のこゝろあさからぬこそ手柔あ

げさせこゝろ〳〵ふ 河海抄 童日記云をそもの望のこゝろ月いと

あかきに月のかげ〳〵しくなる人こそあれをさまる〳〵の師走の

月はもはるかといとりなるもぞ云 枕草紙 まさきまゝきの

ものけさう、

冬の日 冬の日のあはゞかく〳〵しくて暮ぬるより手石

冬の夜 行燈で水菜をうふ許へる冬夜うふ許へ

冬田 近よれば鷺さへ逃て冬田哉 冬

椿 早咲の椿より、

冬枯 草木の枯るをも

いへば、

冬の草 枯るをも

いひ枯残り

冬の山 草木枯て淋しきをいふ、

冬の川 水の

涸るをいふ、

冬の雨 おもしろ〳〵雪もやをもん冬の雨をも云

十一月

吹革祭 八日 祭る所智恩寺の鎮守元賀茂明神より或人云、三十九世満昊和尚稲

荷八幡をくそふゆるより稲荷の火焼やいふより人

十一月八日鍛冶鑄冶石工の徒も多く吹革をと

りあつこのふ家〳〵ハこの神を祭る江戸にて八日の未

明吹革祭その家より擬柑を投うゐ群童爭ひてこ

とと拾ふ毎年此戯とゝ家例とも、

鰤 初鰤そのの部注、

十二月 札納

紀事 良賤年中受る所の諸社の

札を神社ふ納めこれと札納とゝふ、

古暦 新暦ふ對

〳〵そのふ、

冬ごと惜 向景明除夜詩云今年今日

不可留明日明年更可愁

記除夜其先事と祭る長幼聚て飲

む祝頌して散ぜこれと分歳とゝふ、

八歳 風 土

更衣 公事根元 十月一日ハ先御衣ぐあり、帰部

寮夏の御装束と撤して冬のをあらゝ

まく天皇南殿ふ出御ありて節

會のりこれと要冬の旬とハ申ゝ

興福寺法華

十月

會 南都興福寺ニ於テ修セル元亨釈書和銅三年三月藤原不比等和州平城ニ於テ寺ヲ建ツ其大殿の像大織冠造る所なり公事根源九月廿日より七日の間南田堂にて妙法の大会をひらくこれハ十月六日長岡の大臣内麿の御忌日ニてありて父の御ことを始て行ひ給ふ也六日ニ此会と行ふ

金毘羅祭 十日 讃州鵜足郡ニあり人祭る神一座或ハ三輪大明神或ハ素盞嗚尊当山の形ち象の頭ニ似くゆえ故ニ象頭山と号す開基詳ならず一説ニ傳教大師入唐帰朝の日金毘羅神を勸請ありと梵語より 磴十八町悉く石階嶮岨あり又崇徳院の廟と以世ニ金毘羅大権現と称す合せ祭るゆえなり○京安井観性寺ニ崇徳院の社あり

小春 金毘羅の社と称す八月二十六日祭礼あり

小春日 初学記十月八天時和暖春ニ似ルゆえニ小春月と云ふ

颷 和訓栞 木枯の風の義なり〻〻木枯ニあ〻じ嵐とらしとよむハ音便なり人五十嵐とい〻しとよむも同じ字書ニ風過木上曰颷とあり嵐も同じ風ハ倭の俗字なり

兼三冬物

粉雪 つゆく草 こ雪丹波のこ雪といふハ雪ハ米とゆゑ雪ハ米と似と見ばいふなりこまれこ雪とゆゑ丹波とゆふべきを丹波とゆふとぞ云

小米雪 見立ていふなり 遠近集 降ものこそ 雪を節〻この小米ゆきと 豊近

月令孟冬之月水始氷仲冬之月氷益壮季冬之月氷方盛○孫卿子曰氷生于水而寒于水○薄氷厚氷氷柱垂氷銀竹氷花氷面鏡ハ各頭字の部ニ わけて注

氷 藻塩草 凍閉る也 新撰六帖 冬来てハ田川ゆ氷とてゝる水ゆゑま氷のくさびうちそへてゝり為家

氷の声 揚延秀敲氷文曰辨子金盆照暁氷彩絲穿取當銀鉦敲成王磬穿林響忽作玻璃碎地声○一説ニ大寒の時氷ニ音あるとゆふ

氷の衣 毛吹草 水張ふるハ氷の衣 遠近集 氷も衣とゆふん氷ゆゑ 玉海集 水干の衣とゆふん氷ゆゑ

氷ゆゑ 羅綾の衣下紅葉○青藍云ものゝ物と藏ひ包む

物と衣といふも同じ、氷の水と蔽ひ、ろ、まとあ、ちていふ、ろ、さる、ハ上ふ出せる句意と推こそ〳〵、但年浪草ふ出せる説ハ附会といふべし、

氷の花 酉陽雜俎 開成の末河陽黄魚池の氷、花をなす〳〵く縝の如し、

凍 注不及

凝鮒 煮凝 遠近集 煮つゑ凝やひえとところ、ろ、ろ、と

鮒煮て凝と鮒をいふ、

火燵 置炬燵 骨董集 火燵とハ、ものハ近むう〳〵ときこゝろ

力のあり火燵のあき以前ハ物ふ尻うけて火鉢ふそ足と煖めくるゝ〳〵古き絵巻物ふその体ふ見えたり 猿蓑 ふ

こつゝ名旅のこゝろ

木の葉 落葉 すくうせと落葉と木の葉、捻て

や置こゝつ芭蕉

いふときハ同じ、別ていふときハ少し趣意ゝ〳〵ひあり其意を得べし つれ〳〵草 木の葉落るも先ッ落てゆ〳〵む

ふハ下よりさゞ〳〵つゝるふ

ゝゝぞ〳〵〳〵落るあり、

木の葉の雨、木の葉七時雨 白氏文集 風吹枯木晴天雨 千載集

まぞ〳〵ちる槙の板屋ふ音ハ〳〵てゝ

ぬ時雨や木の葉ちる〳〵ん、

木の葉衣 南越志 獞人冬、鵝毛ニ編ミ木の葉を雜て衣とす、

太平廣記 女仙部三云秦の時婦人草葉を衣る、

このゝと なの部生海苔の条ふ〳〵ん、

兄鶏 鶏の雄ふ、脚極めて細く〳〵てとゝ、ハ〳〵〳〵鶏以下の小鳥と捉るゝ、

十一月

暦の奏 朔日 公事根元 中務省より明年の暦を奉るむうし

ハ主上南殿ふ出御ふりてこれを御覧あ〳〵出御ふき

ゝゝハ内侍所ゆ〳〵暦を奏ゝるゝこ、欽明天皇十四年

百済の博士ゞ奉る、 雍州府志 暦毎年南都幸徳井

ふ加茂氏の新暦を受く、梓ふ鏤め世ふ行ふる、今東

大経師暦と称ゝ、〇今免許を蒙ッて暦を販く所、

山田伊勢 三嶋伊豆 江戸武蔵 南部陸奥 世ふ南部のめくら暦

といふ多く重〳〵ゝ

五節帳基試 中の丑 廊前試日 殿上淵

日月の識ゝ、

醉 中の寅 童女御覧 卯日

狩の使 公事根元 中の丑の日とハ五節帳基の試とゝふ常寧殿ふく

主上御覽あり、五節の舞姫、五人あり、あまおりの儀式ありうちく参ると暁参とゝ皆参ることゝのゝく帳臺ふ出御あり、殿上人とも脂燭と候まゝ、主上御直衣より御指貫まゝく、御沓と召る、主上の御指貫ハと召るゝこと、此時の外いあゝ、但御鞠の時ハ、帳臺の試ふ准して召るゝ、あり、帳臺ふ、まゝ海ど乱舞ありゝ、

[江次才] 本朝月令云、五節の舞ハ、浄御原天皇の製ゝる所ゝ、相傳云天皇吉野宮ふ御ゝ日暮ふ琴と弾ゝ給ふ、真あり、俄尓ふ前ふゝる岫より雲気忽ちふ起る、疑ふらくハ、高唐神女の如ゝ、髣髴として曲ふ應じて舞ふ、他ふ見る人、袖と擧て五ゝ、袂まゝ、これと五節と云ゝ、其哥とゝあどもをとめゝ、ひもかゝくまをたりとふまゝとゝ、ゝとゝ、

[公事根元] 中の寅の日朗詠今もゝ、〇殿上の淵酔

[公事根元] 中の寅の日朗詠今様あゝ、ゝゝひて、三献ゝて、乱舞あり、次才ふ沓ともゝて北の陣とゝ、ゝりて、五節所ふむらゝの後、所々ふ参ゝて推参ゝ、あり、〇狩の使

[同上] むゝハ狩の使ちゝ、ゝふとゝありゝれいゝふ、五節所ふゝまゝらんゝゝゝ交野の雉子ふゝとゝめゝゝ使ありしゝ狩の使とハ申まゝ、〇

[公事根元頭書] 卯の日童女御覽の夏童女御覽

[公事根元頭書] 雲間抄ふ詳ゝ、呉竹臺の篇の下ふ、下仕参上の道ゝ、兼香殿西橋より庭上ふ降立て南行も、但竹臺の下ふ至て下仕竹臺の西の頭ゝより歩ませむ、藏人東の頭より行合故實あり、近代案内ちゝぞ云ゝ

[裏書] 童女御前ふ参り、雲客ゝれふ、ゝ前張副ふ、〇豊明の条ゝ、ゝゝ見ゝ、小前張加の部神遊心葉この部豊の明哥の条注ゝ、心葉の条ふ出ゝ、後日の能との部御祭暦賣暦の事前ふの条ふ注ゝ、

[十二月] 御躰御卜奏十日六月ふあり、神祇官中臣卜部ふと率て、明年六月まゝく、のゝとト、事納八日

[用捨箱] 無住雑談集ニ云、むしゝ寺々只一食ゝて、朝食一度ゝゝ次第ふ、器量強くゝて非時と名づけゝ日中ふ食し、後ふ山も奈良も三度食ゝ、夕のゝゝ事と

山中といひて、未申の時むとうふ非時して法師とら坂本へ下りあれば多方寄合て事と名づけて我々世事〜と食もとりて〜事と載るう、接ぎるふ十二月ハ日の短き頃なこ年の暮ハ事せりくるる故ふ八日限マ二食とあるを當時の僧家の風俗ありて事納とまた二月八日も斷あるくもれば八日ゝうり三度食する事始りとのみ〜ふいわるも也、

江戸鹿子 貞享二月八日事始十二月八日事納

日事納」今の俗二月と事納十二月と事初ゝなりふもあるり、正月の式よりかゝりし事あり〜ゝ〇金公事をつぐ〜ふて事納山臣此外十二月と事をきめてのへる證を多し今日いとこ煮と食もと、

還魂紙料 料理物語 寛永

云いとこふあづき生房豆腐芋大根燒栗ゝるなどなり中味噌をそゝ〜ふ煮申ふりいとこふ欲」とあり追々ふ煮る蜘をふ似るとゝの通ふをこ以て從人似とあづ〜ふもべし、〇

月並世話 戸口ふ蕎とつるハ方相の目ふもそゝ人邪気とゝふ事あり古く一説ふ也ふ蕎とつるハ九字のゝゝ〜ゝ〜ゝ春のこの部事始の条ともうゝ〜ゝ〜べし、

五條天神祭

節分勝の餅賣 祭る神大己貴少彦名ゝ孝礼

白米續 九月十日ふ行ふ毎歳節分の夜京師の士民恭詣多し白米と買てこれと自家ふ燃く又小團子の餅と食ふこの餅社の傍ふ勝軍地藏ふ供もる所の餅ゝりて勝の餅ゝ〜或ハもちひとゝもんとゝ〜より名ともゝ〜ゝ〜この二物舊例ふゝうて官ゝりこと〜と賣ゝう〜む近世その料と社司ふあゝ〜制表せ〜ひもそ、

曆の果、曆卷納、曆卷返 古哥ふ多くよゝく

新撰六帖 一のゝる日數のゝどのゝ〜ゝ〜ゝ〜

この故ふ今日うちもと鯛と樣もるあり又蛭子の像前ふおいて實主相混ふ本盃盤器物ふいくまて依く價と定む或ハ千兩或ハ万兩賣る者諸もるもきこハあらんど手とうこと云讃の賣買ふ一時酒鳥の戯液雨たの部時雨の条ふ注も、

兼三冬物悅哉

つの部雀鷄の条ふ注も、

兼三冬物手焙火炉の ふある者

数品あり、

十月殿上の淵醉この部五節の条ふ出ツ

十月天智天皇御國忌公事根元崇福寺ハ行ふる宋鳥二年より

もゝ〻まる天智天皇ハ舒明天皇の御子、御母ハ皇極天皇まり、御位ふつゝもてゝまるいて近江國志賀の郡大津の宮ふ始し〻き、中臣の君をおい〻まるもて国忌ハときふもてゝ〻そあらてゝまるもゝ、これいまゝ〻くゝ〻ぬ事まるりふき、太祖廟ゝ中をゝきゝもゝ、崇福寺ハ近江國志賀寺まり、なゝらの寺ゝと詠るよ〻ハ

雲御抄ふあり、天智天皇の御時この地ふ瑞光ある故ふ精舍と建立まるふと元亨釈書ふ見ゆ

十月秋無草

草冬草の惣名ふ五く藏王花ちゝこその名ふ云ふ

秋無草ゝとふおける〻きのちゝ露

兼三冬物あぢむらかの部鳥の条

ふ注す、

華臍魚老婆魚綬魚琵琶魚の諸名あり 摩波府志綬魚

蓋其腹ふ帯あり、帔子の如く生ゝて其上ふ附く故ふ名くその形ち科斗の如くゝて大ゝるりの盤の如ゝ、

呉都賦琵琶魚鱗ふくゝて形ち琵琶ゝ似ゝ

大和本草国俗鮫鰊と称も未ど出處ど云ハ恐らくハ左ふ称まるべゝ坂東ふ多ゝし、

西州ふハ鰤ゝ冬ハ味よくく春ハ味劣る

網代網代木 網代守

指掌雜学魚落潮来るときハ魚其中ふ入潮退くときハ魚まゝ出ゝ秋の枝折網代と書網の代ゝまゝ

魚とゝるもゝゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ字治近江の田上おゝふ永魚ちんゝあふゝ物ゝ

藻塩草細代人と八宇治ふ細代と

いふ所ありしとぞ住家にして細代を司る者をいふ細代守細代人とも云り 猿蓑 こゞうこと數珠もおもたし 細代守丈草 ○こゝき込し音や夜更の細代杭林陰

厚氷

神代卷記 北方ふ氷あり、厚さ百丈 ○日の思ひもぬちまち

霰

玉あられ 大戴礼 曾子云あられ酒 陽の專氣霰と くゞくあり氷子葉 ある蓋盛陰の気西水ふある時ハ凝滯して雪となる陽氣搏ゝて雷と霰と相入ざるときハ消散〻〻 下り水ふ因て霰となる ○霰酒ハ南都の産し、又霙酒ともいふ酒中霰ふ似る糟あり 天子集 王ゝ霰も酒ふ入るゝる霰れ ○年浪草ふ霰地の錦霰ホを冬季の部ふ出せるハこゝろ〻、古抄こゝふ雜ゝて、

あゞけの鷹

和漢三才圖会 巣と離ゝて自食新撰六帖 山ゞるあゞけの鷹の手もれてもこゝろおくる君かもあるゝ鷹家 霰魚 部 くゝるの条

鼓 赤切 ゝる〻〻、

十月 赤豆の粥 節越歳時記

記 共工氏不才の子あり冬至の日を以て死〻て疫鬼となる赤小豆を畏る故ふ此日赤豆粥を作り食してこれを禳ふ

あかゝの〻ハ

増山の井 本邦ふも冬至ふそこ赤小豆の飯を用ゝるこゝあり、 猿蓑 磨まゝこゝ外ふあれ〻〻赤掐 良品

相嘗祭

上卯 先代旧事紀 今日天皇正禘殿ふ幸し、三公九卿と徵相嘗の詔を宣下〻ふ、三輪住吉熊野熱田、廣田、射駒、降魔大和、津島の大社を祭る其ハ國の国司ふ命じて其國の宮倉の初米を以て礼を供ゝ其社司神巫ホ官幣を賜ひて禘礼を行ふ

阿知女

公事根元 この祭迄きこゝろふ絶てきこゝふ、

かの部神楽の条ゝ出ッ、

十二月 浅草観音追儺

除夜ふ 江戸金竜山浅草寺ふあり、今宵奉詣堂り七日 中ふ充つ、初更のこゝろ鬼形の者一人堂外ふ出、又一人方相氏の假面をかぶりこる者これを追て堂と巡る、後除疫の札三千枚を撒〻て諸人ふ與ふ

詣の人各爭ひ撰うて、撰うて自家の門ふ貼す、

さ 十月 殘菊の宴

[公事根元] 昔菊花の宴八九月九日ゆく又殘菊の宴そ十月五日ふ行なつ〜ありこれも群臣詩と作りて酒とたまふこと重陽ふ同じ、

山茶花

[和漢三才圖会] 其樹葉花實海石榴ふ同じ〜〜〜そ其葉茶の葉の如し其実四〜長し花冬と盛んに

兼三冬物

さはひこめ

霜の異名あり [秘藏抄] さはひこめ蓬ハらこと

冴

[字彙] 冷清甚也、

寒さ

寒き夜 ○有明てんりう、寒き朝 ふ〜〜

さ〜む

ひさ〜〜き寒れ玄来、

さ〜む

隼の小き者あり、隼ふ似て鷂より小し、鶉どとる、朝鮮ふあり、

十一月 里神樂

[連哥秘抄] 内裏の外と悉くわらべ神樂八内裡ゞ本ふ里神樂とらく私の心ゞ居所ふ侍ゞと山神樂とふとゝ、

十二月 寂勝寺

灌頂 十五日 [名勝志] 土人云ゞ寂勝寺の旧跡八岡崎村田とゝふ六勝寺の其一也、[以呂波字類抄] 保元三年十二月十五日寂勝寺ふて灌頂ゞ始めて行りる大僧正覚明ゞ以て大阿闍梨とゝて此寺の櫻ゞ詠まる哥 新古

齋宮の繪馬

晦日 ○齋宮八伊勢國多気郡ふあり今齋宮村あり、多気の都、或八竹の都と名く [增山の井] 齋宮の樹下道の傍ふ小き祠あり晦日の夜里人繪馬とうらる事あり行疫神とあゞひるまゞとうやゝ天王寺の道公法師熊野より帰るさふこの樹下ふ宮し繪馬の神ゝあひ行疫神の馬ふ乗りく音をきく、この繪馬の神前駈をもつゝとかくうつるとあり、さて法華經讀誦の功力ふようてこの神補陀落山ふ生ゝ、觀音の眷屬とあつゝ〜〜〜侍り、[すくかせうし] 齋宮ふ諸民詣て絵馬と掛るその毛色ゞて来年の秋の農業と占ふとゞ、

歳藏市

江戸日本橋の東三

町でうう四日市ふあり、三河万歳江戸ふ来りて脱士の才藏と傭ふあり毎年四日市にてこの價をさだめて傭ふてらのふこゝをを才藏市とのふとぞ、**逆蓑**との部岡見の条ごとし、

冬物

銀竹 羅山子曰銀竹ハ雨とのふふり、李白詩云白雨映寒山森々似銀竹、○垂氷と両説し、**切干製** 切干ハ冬月菜蔵と切ること糸の如くを、こゝとと鐵蘿蔔と云、と両説し、**逐ふ擴け** 晒乾を故切干と名く、尾州多く製之、**金海鼠** あの部生海鼠の条ふ出

北窓心塞 漢志大陰ハ北方北ハ伏し陽気下伏を、

十月

添宮線 荊楚歳時記 晋魏の間宮中紅線と以て日影と量る冬至の後長きを一線と添、文昌雑録 唐の宮中女功と以て日の長短と揆る冬至の後常の日ふ比べ一線の功と増を、

十月衣配 年のえどゆの料ふおくしき人々ふ衣を贈れとゝふ、宇津保物語 源氏玉葛の巻ふ出

十月

維摩会 十日より 南都興福寺ふおいて十六日迄 ことと修を、故事西女略 慶雲二年正一位大改大臣、聖廟安穏社稷傾覆ふきゝ為めふ謹て弘誓と発し、この会と開く、元亨釈書 齊明天皇三年十月内臣鎌子山階寺を建ツ維摩会と修を、陶原の家ふ於く山階精舎を創め維ノ会を設く是維ノ会の始ま、地積酷温ふ成ることハ雨こゝ、寒こゝるときハ雪ことゝ成る、春秋元命包 陰陽凝て雪ことゝ成る雪ハ五穀の精ゝ、○六ツの花、玉の塵、衾雪、雪吹、雪吹倒、こゝれ雪、かち雪、かゞら雪、ゑひら雪、粉雪降、小米雪、以上頭字の部ふ出

雪花 韓詩外傳 凡草木の花多く五出雪の花独り六出 発願文 正徳年部本文考模 因ふ云、此雪の花の風やある夜ひそふ雪の花 菊岳 句ハ、五月雨やゝ降る夜ひそふ松の月 ことゝある雪中菴蓼太ゞ句より

雪消し 紀事 十一月多く雪ふる貴ハ先吟ふ成 賤粉餅並ニ菓実ホの物と

互ふ贈る是と雪潮しとゝ訳そろハ雪まぬきと
れと食へむ寒気と忘るゝの謂なり、雪まぬき

御傘 もゝきゝ冬ゝあり、時雨ふ風のそひゝるとゝふあり、
雪のそひゝるを雪もゝきゝとゝふこれ雪吹ふ似ゝる物あり、

雪空 雪の降空とゝふ、雪氣、雪催ひ 雪げハ雪とも
ひ同じ、雪催ひ、雪の聲 新撰朗詠 吾庭木落紅無跡雪催月晴雪有声 藤原明衡 ○これハ垣
ふ裏表あり雪の声 嵐雪 ○春蘆云月令博物筌ふ
静ふ窓あゝ雪ゝ音とゝ云ふ愚按ゝ雪ふ
月晴とゝ雪ふ合ゝ樹木或ハ竹ゝ積雪おとし
ゝる雪の風ゝふ落る音とゝ雪おと
北地ゝ雪おゝ雪ゝ雪ゝ雪

十二月行

み

十二月 和布苅

兼三冬物異

雪 一名キジン艸、花ハ四月ニ雪の下ニ〻名ハ付て冬ニ季とする。

年炭俵 行年ハ京ハ〻ろ〻ろ狀ひろ湖春

の神事 晦日長門國文字關の北ハあり、年人の社を称も祭る神立座、王依姫彦火々出見豊玉姫不菁合、河度目、礒良あり、祠の後ハ一巨石あり、石ハ因て祠ぞろ、前ハ謁殿舞殿神厨あり、謁殿の下に石の鳥居と建、鳥居と出ざ石磴ありて海の底ハ達を、虚潮日こゝどもこの鄭むる所をゝ、十二月晦日れ夜四更ハ祝衣冠帯劍して鎌と携へ炬と拳石磴三下り、海ハ入和布苅ハ帰る、終夜祝詞あり、元旦ハ和布を神前ハ奠し既ゆてこれを撮し、国主ハ献るあり、

廣雅 霙ハ雨雪雜り下るあり○ぞれみぞるとも

をとらくゝ **深川集** 附御簾ハ〻ろ〻ろ下加茂の社家

みぞれと酒 霰酒ハ博物筌水の花の轉

三の花 霜の異名あり

故昔とも、又雪と六ッの花よりハ、霜と三ッの花ともいふ云、

水涙 鼻中ハ水と出ると鼠

水鳥 浮寝鳥○時珍曰水鳥ハ夜啄水禽ハ味長くゝて尾足る○浮寝鳥、水鳥とのハあり、

堀川百首 水とりの下藻の床のうきぬ枕ハ〻きぬゆひいとれうまとまる臣房 御今

水鳥ハ昼もよく寝る物く、故ハ夜分ハあらぬ、

鵤鶏 桃蛄、巧雀、女匠機雀、巧女、巧婦、

挑雀、ホの諸名あり○時珍曰状ち黄雀ハ似て小し、灰色ハ〻て斑あり、声吹噓ハ如し、喙利錐のごゝ、蒭葦毛虫を取て窠を為る、大さ雞卵の如くゝて、こと繋ぐハ麻髪と以てし、至て精密をふと、樹上ハ掛ぬハ一房二房故ハ荘子ハ云、林ハ巣ゝて一枝ハ過ぎ貞

享式 古抄ハ秋ハて、渡り鳥の部ハ入ます、ぐ雀

日雀の類ハいわらで、尓鶏のゝ物ハ連立ぶ民家の軒ハ馴ぐ馬防と傳ひ水棚ハ和をび声の清ハ蓼吏

小寒し、春帰る姿もこそねハ、

木兎 和漢三才図会 木兎 日本紀用一字

決〻〻〻冬ゝとゝとむべ〻、

大さ兄鵐の如くして全体褐黒色ふ白彪の豆ふ似
るものあり〻臆胸亦同色横ふ白彪あり、相乱て蛇腹
の文ふ似るり頭目猫の如く眼の外白圈と作る眼中
黄赤ふ〻てよく旋転す毛角ふ小き黠彪あり〻夜声
梟ふ似るり世俗頭巾と鴫鶏と蒙らるる或八年の
皮を以て囲と作て諸鳥と執る、貞享式 古抄ハ秋の部
ふ入られ渡鳥ふもあらざ色鳥ふとらざるして鳴声
の物凄きハ寒さを厭へるゆえやしして冬ふ定じ、

水凋 続猿蓑

水るる池の中より道ありそとなる
句冬気ふつれるまるとバ冬季勿論ふ〻し、

十一月 深山草 花景

茵芋 深山榕と訓む、
深山背陰の地ふ多く産む、
其木高く上らず好て偃臥して藤蔓の如し其色
灰白葉莖上ふ叢生む冬と凌て凋まず形ち蓮葉紫
の葉ふ類して長大あり冬梢の間ふ立出碎花と著く
穂となして簇生す彩紅褐色の実と結ぶ樟柳ふ似
て大〻〇和漢三才畠会ふ深山榕とるる八四月細き白
花とひらき秋実とひらきぶとるハ同名別種なるべし

十二月 御髪上 紀事

肖吉日とえらび、御髪
殿官人松明と献衛士るるとと奉る主
を用ひらる 公事根元 蔵人御ぐしあけ
主殿寮ふひ
ひてもくあり、

蓑和田の鯉取

鹿文曰此事古
苧環ふそそり 和漢三才畠会 鯉ハ城州淀川最も良、
武州浅草川常州箕和田ふ次 本朝食鑑 箕和田
の鯉ハ流ふ濯らざして清るるぞ、江近るるぞ湖るる通ぞ、
魚稍肥て脂もく多し〇里人寒中ふ網と捕る鯉是
大るるハ三四尺間漁人ふて
れを懐き捕る者あるぞ、

三冬尽る

初冬仲冬季
冬これと三冬
とるふ 万葉 三冬つさ春ハ入れども梅の
花君ふ〻あらざハ折人もなし〻 大伴家持

十月

燃糟と食ふ

朔日 事文類聚 峡人十月朔日多
く蒸暴と作りて節物とす、
荊楚の人多く燃糟と
食ふるるハ糟ふ

十夜

立日より
十六日迄
無量寿経 此
ふ於て善修

まること十日十夜なるべし他方諸佛の國土ふ善をなむ千歳ふ勝れり云〻故ふ十夜といふ○洛東鈴声山真正極楽寺真如堂天台と以て始まる本尊慈覚大師の作なり此像灵驗ふよりて別時念佛と始むこれと十夜といふ蓋伊勢守貞國聖一忌十七日○洛陽恵日山東福寺開山忌しめてこれと修む

也紀事今日古丈ふ付物と飾り午後聖一の像を腰輿ふ乗て寺僧前後ふ随従ひ經堂の須弥壇ふ安置も此開山忌昨今と半中遊覧の終ともに故ふ弁當納といふ聖一ハ弘安三年十月十七日寂も偈ニ曰利生方便七十九年欲知端的佛祖等傳云云の真筆と開山堂ニ掲

時雨夕時雨小夜時雨盈夜のわらちまく陰晴と論ぜを時々急雨ありこれと時雨といふ初時雨村時雨泪の時雨袖の時雨川音の時雨松風の時雨各頭字の部ふわらて注を○

液雨時珍曰立冬後十日と入液といふ小雪ふ至て出夜といふ又薬雨といふ百虫ニ日を飲ざるを伏蟄し て来春ふ至る云〻和俗液雨と訓を時節を取

合せて

兼三冬物

霜見草冬く菊の異名〻藏王ひく代へし

松の木うけの霜見草ともいふ

霜今朝の霜朝霜霜夜霜日和霜解

霜天戴礼霜ハ陰陽の気あり陰気勝ることを凝て霜となる秋名ふ霜ハ衆草ハ其氣慘毒ありて物皆喪ぶるあり○青女さいひとる

霜の三ツの花ホの異名あり各頭字の部ふ注を

花華談天至中青州盛冬ふ花ふ濃霜と屋尾ふおく皆百花の狀ちをあす

霜の

霜の

霜の

て 衣笠内大臣、

霜とれ

[同上] くふはきて山のあさ霜ふかし

それて空はるかなり雨はふり花に

光俊 [ひとこ集] 旬 夕薄くもり日はくれて霜さえて別

○青藍云上ふあげる哥の意とも言葉ぞふ霜と

見とは空はるかなりてこまかく霜の

ふらぬとのふるは霜は晴天なる物なり

霜の鐘

[山海經] 重

山ふ九鐘あり霜ふるときは自ら鳴注云霜ふるときは

金気應ずる〉 [虚栗] 金山の金霜ふ響声寒し芭蕉

[遠近集] つくねとも此鐘ひゝく霜夜ふる重安

[宋郊霜鐘詩] 響沈和月落声遠帶霜殘

霜の声

[匠材集] 紹巴 霜の色注寒時ちゝくと声あるし

云く [句兄弟] 酒ゝさき蒲團おきて霜の声其角

霜の鶴

[八重垣] 霜夜の雇ハ霜ふ苦もむものくるとて霜ふ

雇ハ霜の雇ととのふ

霜の袴

古式ふ載ぞ按ずるふ霜柱ふ對して霜の袴

一面ふるきことなる霜といふふや

義未詳、作例とあげて後勘と俟のく [遠近集] のかり

霜とふ袴者とうん五ッ子の橋の霜 保友

み

質物の霜のうる袴 春遊 降霜の袴者とぞて六ッ

の花 保友 [玉海集] 日あゝ人まゝ破るや霜のあさ

霜やけ

[前漢趙充國傳] 家語の患注

重治、

云く○和俗ふ 三云寒ふ因て家こ指の凍るし

霜やけ

雪

木の葉ふとゝ

ふ川るとゝくゝ○ねてふきあ

ある雪の下ふけく

戶をとそくるやもづり雪 荷風

雪ま紀

[御傘]

もるとゝへて凡の事ふふるゝ

のとゝくゝと云く

[堀川百首] 波のゝるゝゝらぐこゝとわ

くる舟とやこぎりと

せもまゝ紀かぞをる

篠吹

[楽の条ふ]

あの部鶯の

白炭

[薩州府志] 河内國光の滝の土人樹の枝を伐る事五七

すむゝ小枝と連ねとれと焼其色白灰色これと白炭

と称もの 細炭とゝふ黒き切炭の間ふ雜へ置こ

炭中の飾とも○白炭や焼ゆむりの雪の枝忠知

炭

晉の羊琇性豪侈て費用復齋限ふ常ふ

屑炭と和し獸炭と作り酒と温む落下の豪

貴競ひてこれふ做ふ【国老談苑】宋の太祖常に冬月獸炭を徹つ左右徹して曰今日苦寒、上の日天下の民寒き者衆し朕何ぞ獨温渝ふらんや

助炭 冬、春地炉と西夏ハ炭と助炭といふ、手ろ

爐 火炉の小き者

生薑酒 【本朝食鑑】生薑酒凍瘃及び冷積と数品あり、

生薑堀 治を、

十月

襪 くの部献履襪と

【滑稽雑談】本草ホの説によらバ秋月根を堀べきふや、京都ふハ多く冬月ふほるゆゑふ近来ハ春物ふ十一月ともに、猶東國よハ秋分前後ふ堀べ、

新干蕪、新干大根 九干蕪ハ冬至以前ふ根を取て、襷間ふ掛てこれを乾うを、ゆゑふ干蕪と名づく春月煮食ふ極て甘美、

十二月

おはもと 【能諸歳時記】この月をいひて年極の略、づともと連声ありていハつもを打まかせ言とのうり後師走ようて種々の説ありを者ハ

暗推あり、奥儀抄ふ云この月僧とじりく佛名と行ひ或ハ経をよませ、東西小駈走ようる故ふ師走月とあやまれりと是字ふつきて説設くるの誤ふ貝原篤信式豊後国ふ四極山あり四波津山と称をその名も訓ふ證ゆくまたべ〳〵とこの説其要を得るふ似たりもしかるも四ふ数の四ふあるべしそ〳〵のとき畧せるあれバ四波津と書ハ可ふ真名ふハ年極とこのく西〳〵、

神今食 十日 六月十二月一年ふ両度あり夏のこの部ふ

正月事始 十三日 【紀事】十三日正月万支の【年暦】始そ修之俗ふこれと正月の事始とのふ正月用る所の物多く買之、

勝の餅 この部九条天神祭の条ふ出ツ、

鹽引鮭、塩鯉 このごろひ歳暮の心あるふ冬あり、

齒朶刈 【虚栗】入ふ齒朶を命うれ氣落て冬、季子の部ふ出せり作例ひ〳〵し、

除歳、除夜 【沈活筆談】以新易舊曰除、如新舊歳之交謂之歳除

ゑの部ふ併せ出を

十月

氷魚を賜　公事根元　更衣の節会ふ三献の後氷魚を賜ふ、

の花　五出細き白花をひらく　天和本草　拘骨本草時珍説ひらきふあくて、木皮を煎じ鳥もちふもとと有之、

枇杷の花　夏のひの部枇杷の実の条ふ注を、

鵁　和漢三才　鶴金　大さ雀の如し頭黒く白き處あり、俗霜降とふ、頷頬正黒、背翮灰赤ふく黒き處あり、翅の上ふ白き羽黒き羽あつそ層とこうふ、脚蒼黒其声清亮ふして多く囀る、又黄鶺鴒あり、貞享式　古抄ふい渡鳥の部ふ入るれど其名もその声も朝霜の気色といひ秋ふ小鳥の多くとハ冬の部ふ跨きて此名も加減らふべきあり、

燕

三冬物

氷魚　名産ふて他州ふあ〜伊勢江戸の江ふある白魚ふ勝て潔白ふるものあり、江州田上及び宇治川ふ網代と打てこれと取堅田ふそハ攫網を以て多く取ふ、

氷魚の使　延喜式　山城国近江国氷魚網代一處其氷魚九月ふ〜十二月、

ふいふるまて貢之云々

氷面鏡　藻塩草　紐鏡と書氷のごとの

これと氷魚の使ふ〜、

火鉢、火桶　桐火桶　枕草紙　人の家ふ

如くあつ

とふ〜、

竹筥ふ竹ぎたる火桶云〜古制の図とふ内真鍮等ふて〇ふて張外ハ桐の木とふ〜ふると室とふ或ハ木地或ハ箔ふたぐ其上ふ彩色の絵を書ふ物〜、

胼　字彙　胼と疹と同〜

一文字

葱ふ〜ねの部ふ〜べ〜、

干葉釣　ほの部ふ〜べし、

十一月

日吉祭　中の申の日〇一年ふ両度あり、夏の部ふ〜べ〜、

平

野祭　上の申日一年ふ両度あり、夏の部ふ〜べ〜、

日吉臨時祭　中の申　公事根元　建暦三年十月十八日ふ〜り始めて殿上の使と立らる、過ぬる八月ふ〜延暦寺の衆徒長楽寺ふ〜官兵の為ふ多く誅せらる、かゝるの事ふて、ものふろ御願ありふるとなく

日蔭の糸、日蔭の蔓との部豊明の条ふ注を、日の使との部御祭の条ふ出ず、

十二月 柊賣 也の部節分の条ふ出ず、

も

十月 子叟の旬 公事根元 大とこの義、孟夏の旬ふ初ちて

紅葉散 貞享式 ふ古式とかどさく秋と、兼もぶんどこい古式ふ初る者て、

三冬物 もち雪 青藍云ふもち雪とかつる詞増山の井ともの後ふ撰める諸抄ふなもちと假字とそ書て故ふ名義明らかならずふとう、月令博物筌ふ雪の石又ハ木ふ付へ、うつもりうつるとかそたるもあり、雪とかつとかつ心ふ心ふ心ふ

見せ小丸の餅と枯枝ふ貼て
これと翫ぶことと餅花といふ

廿日 神社便覽 官者殿ハ京極四条ふ鎮座世擧てこの
神ハ誓文起請赦免の社とゝ〻 紀事 俗傳ふ此神ハ偽
盟の罰と免もせ〻むとゝ〻ふ故ふ商賣此社ふ詣て繁き
賣の罰と被ふふり故ふ十月廿日夷講詣ると誓文被
とゝ〻ふ此社何神ふるや詳ふ〻び世ふ土佐坊正後と千ハ宗後
義經の前ふて偽り〻追討使〻ら〻ぎるとと誓ふ因く罰
果ふ殺され〻故ふ他人の偽誓の罰と救ふとゝ〻 青女 高秀日青女ハ青天
の王女霜雪と主るこ

十月 誓文被

兼三冬物 列率繩

この部鷹狩の条注ス

西施乳

河豚

の異名〻ふ

十二月 節分

豆打 松さも 鰯さい 鬼外
頭さも

の部〻ん〻し

福ハ内 紀事 凡節分ハ立春の前日ふあ〻年内節分
年越 あ〻〻きハ禁裡熱豆と殿中ふ撒せられて〻く
疫鬼を逐ふ春ふあるも亦然り今夜大豆を撒と拍と
いふ同夜家々の門戸ふ鰯の頭首共ふ狗骨の條を挿

む傳いふこの二物疫鬼の畏る所あり一家の内ふ
事と執る者と年男とゝふ高声ふ鬼ハ外福ハ内と呼
て疫と禳ひ福とりとも〻 下畧 ○おゝ〻の頭さも 土
佐日記 九重の門の注連繩おゝ〻の頭ひ〻らぎさも
ちんどいのふとでいひあ〻る云 日本書紀 云口女即鯔
魚云ト部の說ふ鱆ゝとゝり道遥軒ハ名吉伊
勢鯉とゝふ魚〻云〻〻〻

ひ室尽〳〵ふど重きこゝる紙の前垂とうけ、破りとる竹と両手ゝ持てこゝとゝき、雜しゝふぐら祝詞と唱く門口ゝ躍こむ、

節季 倭俗臘月と節季とゝふ、

節料米 日本歳時記十二月上旬或ハ中旬臘月の節ゝ入て多く米と春貯へて以て正月の用とゝゝ〳〵、○嚮野集附米春ゝいゝ

歳暮祝ふ 凡七記呉蜀の風俗ゝ歳晩相与ゝ餽るゝれを

餽歳とゝゝ云云かの國この國やもふおゝ〳〵、

十月

水官解厄

潛確類書千葉と真の水仙けの部下元

水仙花 千葉の者ゝ

の条ゝ出、

もゝ〳〵云云 旱菓の者と金表盃銀甚堅と名く、

兼丈三冬物 杉の香を

魚肉ゝ〳〵移さんゝゝ、杉板の上あそ焼ゝ、箱そ焼ゝ、

炭 小野炭、豆炭、輪炭、畑り炭、

獸炭、賣炭翁、各頭字の部ゝゝて注ス

炭斗 茶經烏有是炭斗ゝ、茶竈獸ゝの

異ゝゝ、好む

山炭頭 玉海集礦室ゝゝ香とゝめゝ炭ゝしゝゝ

宗方○青藍云伊豫の産某云我国ゝ炭のまゝ焼尽さゝ煙ゝと炭ゝしゝゝ云云宗方の句此意ゝ合て、年浪草ゝ、一俵の内そ大ゝる炭ゝゝ

炭竈 ゝゝゝ理り聞ゝゝれとさてゝ風情ゝゝ、炭と焼く竈とゝゝ御今山類ゝ

蓑 炭竈ゝ手負の猪の倒れ伏ゝ兄

炭焼 御今山類ゝ

あゝゝ人倫ゝ、

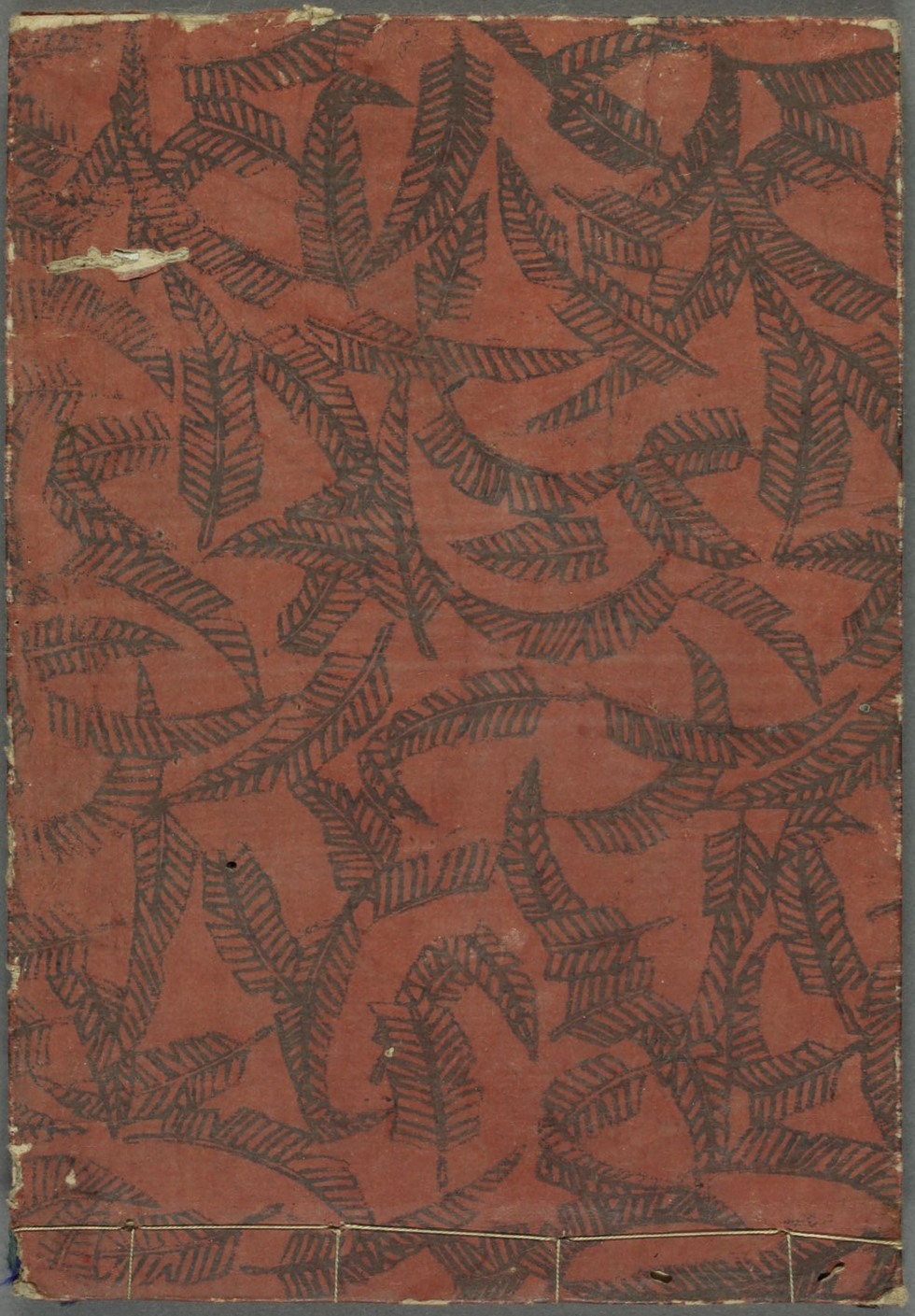
炭賣 冬の日炭賣のおのゝ妻ゝゝ黒ゝゝ重五、

すゝのつゝ ゝゝの部ゝ注ス、

雀鷂 物語此事陽成院の御時ゝ始ゝ三日と用ゝゝ此日恩宿ゝゝ吉日ゝゝ煤ゝ掃ゝ

十二月

煤拂 長明四季

と、

増補歳時記琴草冬之部終